
インフィニット・ストラトス×仮面ライダー～無限の蒼穹、正義の仮面～

無銘

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

インフィニット・ストラトス×仮面ライダー〜無限の蒼穹、正義の仮面〜

【Nコード】

N8119Z

【作者名】

無銘

【あらすじ】

かつて世界征服を企む悪の組織『ショッカー』から『クライシス帝国』までの組織と戦ってきた11人の男達は、女性にしか扱えない究極の機動兵器『インフィニット・ストラトス（IS）』の登場によりそれまでとは大きく変わったこの世界の片隅で13人の少女達とそれぞれ出会った。ISという力を得た巨悪が少年少女達の、そして人類の自由と平和を奪わんとした時、男達は再び少年少女達の、そして人々の前に現れる。

時代が望めば、人々が呼べば、そして誰かが助けを求めれば…彼らは必ず甦り、何度でも立ち上がり、そして嵐と共に…嵐のようにやってくる。

これはそんな11人の仮面の男達…『仮面ライダー』とかつて彼らと出会い、『インフィニット・ストラトス』と何らかの形で関わっている13人の少年少女達、そして彼らを取り巻く人間達の物語である。

本作品は同じ題材の短編『白と銀』と『姉妹の太陽』及び『白騎士の真実』と同じ設定、世界観という前提で書いております。また原作崩壊、キャラ崩壊、独自設定・解釈、時系列矛盾、捏造、誇張、知識不足、不要なネタバレ要素などが多分に含まれております。ご注意ください。

プロローグ（前書き）

本作品は『IS インフィニット・ストラトス』と『仮面ライダー』、『仮面ライダーBLACK RX』までの所謂『昭和ライダー』が同一世界観という設定で書かれています。その為独自設定・解釈などが多数含まれておりますので特にご注意ください。

プロローグ

かつて、この世界には世界征服を企む秘密結社『シヨツカー』が存在した。

シヨツカーはナチス・ドイツを母体に誕生し世界中を股にかけ暗躍した大規模な組織であり、ナチス時代ドイツで盛んに研究された人体改造技術：『改造人間』の製造技術を始めとする優れた科学技術と、組織に忠誠を誓う様に洗脳を施した改造人間：『怪人』という強大な戦力を多数保持している事を背景に様々な犯罪や破壊工作を世界各地で展開していた。

これに対して各国はそれに対抗し得る組織として『ICPO（国際刑事警察機構）』：通称『インターポール』の大幅な規模・権限の拡大及び強化を定めた『リヨン条約』を締結し、インターポールを中心に各国が連携してシヨツカーに対抗しようとした。

しかしシヨツカーは手強かった。その科学力、何より怪人の戦闘能力は人間サイズとは思えぬ程のものであったのだ。

そして多くの人々がシヨツカーによりその命や家族、友人を失い、夢や希望、未来を踏み躪られ、笑顔や生活、幸福を壊され：そして自由と平和を奪われた。

絶望的であった。誰も彼もが絶望するしかない：そう思っていた。

しかし、そいつは嵐と共に…まるで嵐のように突然現れた。

そいつはシヨツカーによりバツタの能力を持った改造人間として改造手術が施されたが脳改造寸前に脱出、人類の自由と平和を守る為『仮面ライダー』を名乗りシヨツカーに戦いを挑んだ。

仮面ライダーはその身一つで怪人を次々と倒していき、単独或いは少数でシヨツカーの計画や拠点を悉く潰していき、遂にはシヨツカーを壊滅させる事に成功した。

更にシヨツカーと戦った2人の仮面ライダーはシヨツカーの後継組織『ゲルシヨツカー』とも戦い、勝利した。

シヨツカーやゲルシヨツカー壊滅後も世界征服を企む『デストロン』から『クライシス帝国』までの組織が出現する度に2人の仮面ライダー、そして組織の出現に呼応するかのようにその都度現れる新たな仮面ライダー達により組織は壊滅していった。

最後の組織クライシス帝国が11人の仮面ライダー達により倒されて以降、世界征服を企む悪の組織が現れる事はなかった。

これで漸くこの世界には自由と平和が戻り、平穏となった筈であった。

だが、そうはいかなかった。

クライシス帝国が崩壊してある程度年月が経つとそれを見計らったかのように、第二次世界大戦前後：シヨツカーとほぼ同時期に誕生し、それまでも散発的に活動が続けてきた謎の国際的秘密組織『亡^{フレ}国機業^{ントム・タスク}』が本格的に活動を開始した。

『亡国機業』は活動内容自体は規模の多寡こそあれシヨツカー以来の所謂『悪の組織』と変わらない。

しかしそれまでの組織と異なり目的からして一切不明であり、科学力こそ劣るもののその分この世界に広く深く根を下ろしており、社会への浸透度や根の深さなら『ゴルゴム』すら上回るというそれまでの組織とは別方向で厄介な存在であった。

更にこの世界を根底から覆えし、大きく変える出来事が起こる…『インフイニット・ストラトス』、通称^{アイエス}ISの登場だ。

ISは元々若き天才科学者篠ノ之束が発明し、次世代の高性能多目的宇宙服『マルチフォーム・スーツ』として開発が進められてきたのだが、その第1号機『白騎士』の発表から1ヶ月後に突如世界中のミサイル基地のコンピュータがハッキングされ、直後に日本に発射された全2341発のミサイルの約半数を『白騎士』が迎撃し、

更に各国が送り込んだ艦隊や戦闘機編隊を一人の死傷者も出さずに無力化するという事態が発生した。

後に『白騎士事件』と呼ばれるその出来事により、ISが現行兵器全てを凌駕する『究極の機動兵器』である事、そして「ISを倒せるのはISだけである」という篠ノ之束の言葉が事実である事が証明され、世界は大混乱に陥った。

しかし同時にISを野放しにすれば核兵器や改造人間：怪人と同じように人類を脅かす危険な存在になる事を危惧した各国は、ISの軍事利用の制限と各国間のISに関する情報公開と情報・研究共有を定めた『IS運用協定』：通称『アラスカ条約』を締結した。

同時に機械工学の第一人者である光明寺信彦博士の提唱で『アラスカ条約』に基づきISの研究開発の促進、各国のIS保有数及び動きの監視などISに関する事項を扱う国際機関：『国際IS委員会』が設立され、世界中から軍事、機械工学、生化学など様々な分野の専門家や有識者が集められ、ISに関する研究や各国との連絡・調整が急ピッチで進められた。

そして国際IS委員会の活動や援助、事前に『白騎士』のデータを提出されていた『国際宇宙開発研究所』が提供されたデータを開示した事、篠ノ之束が中枢部の『ISコア』以外の情報開示や各国へのISコア製造・提供に応じた事が併さりISの研究・開発や環境整備は急速に進み、『白騎士事件』から僅か一年足らずで21の国と地域が参加して行われるISの世界大会：国家の威信をかけたあらゆる種の代理戦争でもある『モンド・グロツソ』の第1回大会開催までこぎつけた。

更にISに関する人材育成の為、あらゆる国家機関から独立し、不

干渉と定められたIS操縦者育成機関として日本に『IS学園』が設置された。

だがISの急速な普及に伴い社会もまた大幅に変わっていった。

それまでの兵器を凌駕する力を持つISは何故か女性しか操縦出来なかった。その為自然と各国軍においては女性が進出していくようになった。

さらに何の巡り合わせか同時期に『ラディカルフェミニズム』の論客レベッカ・ランバートが極端な女尊男卑思想と、その理想社会建設の為には男性から武力を奪えばそれが成ると唱えた事が加わって、世界中に女尊男卑の風潮が急速に広まった。

こうしてそれまで男尊女卑的であった社会は一転して女尊男卑が当たり前の社会となった。

それに加えて世界最初の男性IS操縦者の登場：『オリムラ・シヨック』やそれと深い関わりがある『デュノア・スキャンダル』と言った世界をひっくり返しかねない大事件、そしてISに目を付け、ISという力を入れた『亡国機業』の暗躍により現在のこの世界はますます混迷の度合いは増している。

ある者はその変化を喜び、ある者は変化とその原因となったISを憎み、またある者は急激な変化に戸惑った。

そして多くの者がその変化に乗じて力を入れた『亡国機業』などの悪により自由や平和を脅かされ、助けを求めた。

その助けを求める声に応えるように、彼らは再び立ち上がった。

IS登場以来何もかもが大きく変わったこの世界においても、11人の仮面の男達…仮面ライダーは変わらなかった。

彼らは以前と同じく人類の自由と平和を守るという己の正義を貫く為、そしてそれを脅かす悪から人々を守る為にその怒りや悲しみ、憎しみを仮面で隠し、『亡国機業』を始めとする新たな力を手に入れた悪との戦いを開始した。

そしてその身体を、命を、魂を…全てを燃やして悪の野望を阻止するためにもまた戦い続けている。

これは『仮面ライダー』としてこの世界を守る為に戦う11人の男達と、かつて彼らと出会い、そして助けられた13人の少年少女達、そして彼らを取り巻く多くの人間達の物語である。

プロローグ（後書き）

拙作をお読み頂きありがとうございます。

今回は今までのISと仮面ライダーを題材とした短編を踏まえた上で連載という形式をとる事に致しました。

連載という形式には慣れていない為不手際もあると思いますが指導、ご指摘頂けますと助かります。

では改めまして今後とも拙作を宜しくお願い致します。

第一話 俺の名は（マイ・ネーム・イズ）（前書き）

この話は同じ題材の短編群、特にこの話同様に織斑一夏と本郷猛を主役とした『疾風の心』の内容を踏まえておりますので、予め読んで頂きますと幸いです。

時系列的には『IS』第7巻の無人IS『ゴーレム3』（本来はローマ数字ですがこちらでは表示されない為便宜上この表記とします）のIS学園襲撃から2週間前後経過した頃と設定しています。

第一話 俺の名は(マイ・ネーム・イズ)

世界唯一のIS操縦者育成機関『IS学園』の寮。ここに世界初の男性IS操縦者でありこの学校唯一の男子生徒でもある織斑一夏の部屋があった。

その部屋の中には部屋の主である一夏の他に6人の少女が居た。とうより一夏は縛り上げられた状態で椅子に座らされており、6人の少女が一夏の部屋を荒らし回っている状況だ。

「折角の休日だったのにいきなり叩き起こされて…いきなり縛り上げられて…部屋を荒らされて…一体どういう事か教えてくれ!!」

「……………駄目だ」「……………」

「駄目!?!どうしてだよ!?!」

一夏の魂の叫びを一言で切り捨て少女達は部屋を探索する。

「ベッドの下は無しか…セシリア!」

ベッドの下を覗き込んでいた黒髪の少女…篠ノ之箒が引き出しを探っている長い金髪の少女…セシリア・オルコットに声を上げる。

「こちらありませんわ!」

「天井裏もよ!」

「ラウラ！他に隠しスペースみたいなのは見当たらない？」

「いや、私の見立てでは無い」

「つまり残るは…クローゼット…！」

更に凰鈴音、シャルロット・デュノア、ラウラ・ボーデヴィツヒ、更識簪がそれに続く。

こんな事になったのは一週間前に『銀の福音』や『仮面ライダー』を模した無人ISが学園を襲撃した際に重傷を負った姉で一夏の担任教師でもある織斑千冬の友人…本人達は腐れ縁と言っているが…滝和也を昨日見舞いに行つたのが原因だ、と一夏は推測している。

最初は二人きりで色々雑談していたのだが、例の如く好みの女の子のタイプを和也が聞いてきた所に丁度今この部屋にいる6人が入ってきた。

和也と共闘した他の5人はともかくその時に学園に不在で和也とは面識の無い簪の簪が何故見舞いに来たのかは疑問だが、そんな事はどうでもいい。

むしろ丁度その話を聞いていた6人が何故だか知らないが明らかに殺気立っていたのが問題だ。

しかも悪い事にその直前に和也が一夏にエ…その手のいかがわしい本を持っていないか聞いている所を耳にしていたらしく、その事について執拗に一夏に聞いてきた。

その場は直後に入ってきた和也の担当医で簪と同じく一週間前は学

園に不在だった学園校医の一人『学園最自由』こと緑川ルリ子の活躍…と言っても6人をハグしようと追い掛け回したただが…により収まった。

そして安心していたら翌朝早くにドアをピッキングして侵入してきた6人に叩き起こされ、縛り上げられ、部屋をくまなく探索されて現在に至る。

勿論先ほどからその手の本は隠していないと何度も主張しているのだが、彼女達は無視している。

そうして現在6人はクローゼットをくまなく探索している。すると簷が何かを見つけたようだ。

「何だろう…これ…少し大きめだし…ボロボロだし…？」

そして簷はクローゼットからジャケットを…俗に言う『革ジャン』を取り出す。

簷の言う通りそれは一夏が着るには少し大きめで、至る所に縫った跡がある継ぎ接ぎのものだ。

「それは…」

「『猛さん』から貰った大切なもの、だろう？」

答えようとする一夏の後を引き取り簾が答える。

「猛…さん…？」

「ええ。一夏さんの命の恩人で…『理想のヒーロー』ですわ」

「ほら、昨日滝捜査官のお見舞い行く途中で話したじゃない。一夏が誘拐された時に一緒に居て…そして助けてくれたのがその『猛さん』らしいの」

「と言っても僕達も一夏や織斑先生、滝捜査官から聞いただけなんだけどね」

「それと村雨さんの話では村雨さんの大先輩であるとも聞いているな」

そして疑問を口にする簪に対してセシリア、鈴、シャルロット、ラウラが続ける。

彼女達の言う通り、一夏は誘拐された際に一夏を人質にされる形で一度は一緒に捕まった『猛さん』こと本郷猛により助けられた。

犯人グループが猛と第2回モンド・グロツソ決勝戦を棄権して弟の一夏救助に現れた織斑千冬、そして千冬の警護に当たっていた滝和也により鎮圧され、一夏が千冬と再会を果たした直後に猛はいつの間にか姿を消していた。

その為一夏と猛が一緒にいた時間はそこまで長くはないのだが、一夏の脳裏には本郷猛という男が自分に見せたその優しさや強さ、正義、信念、生き様、魂が焼き付いていた。

故に一夏にとって本郷猛とは命の恩人であると同時に自分もこうありたいと願った憧れのヒーローでもある。

そしてその事を簪以外の面々は前々から一夏から聞いている。

ちなみにこのジャケットは鎮圧途中で上着を引き裂かれ夜風に吹かれ震えていた一夏に着ていた猛が掛けてくれたものだ。

一夏はこれを宝物として寮に持ち込んで保管しており、破けたりする度に自分で繕ったりしていた。

そこにドアが勢いよく開かれる。

「フッフ…見つけたわよ、簪ちゃん。それと他の皆も…昨日の分までたっぷり可愛がってあげるわ」

「……………ルリ子先生!?」「……………」

緑川ルリ子であった。先程まで更識楯無をハグしようとした地獄の底まで追いかねない勢いで逃げる楯無を追跡していたと聞いていたが、どうやら捕まったらしい。そして続く獲物を求めて此処までたどり着いたのだらう。

そして簪のみならず他の5人もルリ子には気に入られて…『必ず』ハグする対象である。

昨日は病院内という事で向こうが自由に動き回れなかった事もありどうにかして逃げられたらしいが、今度ばかりはそうはいかないだらう。

この中では一番日本の常識に疎いラウラですらルリ子のこの悪癖には辟易している。まして他の5人は言わずもがなだ。

そしてハグしようと飛び掛かるルリ子を躲した6人は蜘蛛の子を散らすように逃げ出した。

「ちょっと待ちなさいよ！…あら、貴方どうしたの？趣味？」

「…いえ、出来れば解いて欲しいんですが…」

一夏は溜息を付きながらもルリ子に縄を解くように頼むしかなかった。

病院の待合室らしき場所に設置された椅子に一人の女性が座っていた。

いかにもスーツ姿が似合いそうな凛とした雰囲気、伶俐な美貌、メリハリのあるスタイルの良い美女だ。と言っても休日は今もスーツではなく私服姿だが。

暫く座っていた女性だが、やがて病院の病室のある方向から歩いてくる男の姿を見ると立ち上がる。

男はラフなジャケット姿だ。手にはバッグを持ち、頭や顔には湿布らしきものが貼られている。

男は女性の姿を見つけるやそのまま歩み寄る。

「しかしよく考えりや凄い光景だな…かの『ブリュンヒルデ』がわざわざ病院まで出向いて直々にお迎えだなんてな」

「その様子では殆ど完治したみたいですね…それと一応聞いておきます。貴方本当に生身の人間ですか？」

「そう言つなよ、俺だつて驚いてんだから…わざわざ悪いな、千冬」

「いえ、こうなったのも私が原因みたいなものですから気にしないで下さい、和也さん」

そう女性…織斑千冬は歩み寄ってきた男…滝和也と会話を交わす。

織斑千冬はこの病院の近くにあるIS学園の教員であり、現役時代は第1回モンド・グロツソの総合優勝者『ブリュンヒルデ』として名実共に世界最強のIS操縦者として君臨していた。

そして滝和也はFBIから出向してきたインターポール捜査官であり、千冬とは第2回モンド・グロツソ以来の仲だ。

その和也が何故IS学園近くの病院に居たのかと言うと、無人ISのIS学園襲撃の際に負傷し入院していた為だ。

専用機限定タッグマッチ中の無人IS襲撃から一週間後に和也が追っている大規模犯罪組織『亡国機業』ファントム・タスクによる学園襲撃…和也曰く『火事場泥棒』を察知した千冬は和也をIS学園まで呼び出し、協力を要請した。

和也はそれに応じ、『亡国機業』の企みを阻止したはいいが、その翌日に襲撃してきた『仮面ライダー』及び『銀の福音』の姿を模したISに生身で戦いを挑み、重傷を負った。

別に戦いを挑んだのは和也の自発的な意志なのだが、今回事件に巻き込んだのは自分からである事、何より無人機を送り出していたのは自分とは古い付き合いである篠ノ之束だろうと千冬は推測している事…というよりコアの製造法を知っているのが束しかない現状未登録のコアを使った無人機を送り込めるのは束しかないが…から千冬は和也の負傷に責任を感じている。

だからこそ校医の海堂肇や緑川ルリ子に筋を曲げて和也の治療を担当してくれるように頼んだ。どちらも和也とは古い付き合いである為に頼まれなくてもやるつもりだったらしいが。

そして和也は入院して二人による治療を受け、遂に退院と相成った…一週間で、だ。

少なくとも千冬の見立てでは二ヶ月は入院する必要があるそうな重傷だった筈なのだが、いくら肇とルリ子の腕が良くても回復が尋常ではなく早い。昨日和也が退院すると病院から戻ってきた二人から聞かされた時に思わず耳を疑った。何回も肇とルリ子に確認し、最後にはこれは一体どういう事なのかと聞いたりもした。

肇とルリ子も和也の回復力に驚いており、肇も千冬の問いには黙って首を振るだけで終始し、ルリ子に至っては「こっちが聞きたいわよ！」と逆ギレしていた。

もつとも、本人も驚いたらしく、長めに見積もって一ヶ月の療養を本部に申請して受理されたのだが僅か一週間でほぼ完治してしまい

途方に暮れているらしい。

いくらシヨツカーからクライシス帝国まで出現しどんな作戦を展開していても大抵は一週間で平静を取り戻している日本でも人の身体ばかりはどうしようも無い筈なのだが、どうなのだろうか。

そんな事を考えている千冬に対して和也が口を開く。

「それでよ、わざわざこんな所まで出向いて来たって事はお前の奢りで快気祝いでもしてくれるんだろ？」

「…歳下にたかる気ですか？」

「いいじゃねえかよ、IS学園の教員なら俺より給料いいんだろ？」

「貴方だって本来なら私と同じくらい貰ってる筈じゃないですか」

「いや実はさ、今回派手に暴れちまったお陰で私物の『アレ』全部修理に出しててな…今割と金欠なんだよ」

「貴方って人は毎回毎回…」

いつもの如く軽口を叩く和也に千冬は最早何回目となるか分からない溜息をつく。

いつもそうだった。出会った時も、一夏が誘拐された時も、千冬の教え子であるセシリア・オルコット暗殺未遂事件の際に『メルクリウス号』に乗り込んできた時も、一週間前に千冬の依頼でIS学園まで出向いてきた時も、いつもそうだった。

この男は一見不真面目で、いい加減で…しかし千冬の頼みや一夏やセシリアの命を守る為に処分覚悟で、命を進んで懸けるくらいに熱く、気高く、優しく…対照的に根は真面目な千冬が何だかんだで和也が嫌いになれないのはこれが理由だ。

そして尚も口を開こうとする和也の頭に情け容赦の無いハリセンが落とされる。

「痛っ！何しやが…」

「何が『何しやがる』だ！俺だけじゃなく織斑先生まで心配させやがって！」

ハリセンの主は千冬ではなくその近くに立っていた初老の男性であった。

「…おやつさん!？」

「全く、折角人が見舞いに来てみれば歳下にたかりやがって…元気になって、良かった」

「…すいません、おやつさん。ご迷惑おかけしました」

「気にするな。お前も猛や隼人達と同じで、俺にとっては息子みたいなものだから」

ハリセンで和也の頭を叩いた男性は和也を叱責しながらも最後に柔和に笑ってみせる。すると和也は一転して恭しく一礼する。

「あの、和也さん。立花藤兵衛さんをご存知なんですか？」

「ご存知も何も…前にお前にも話した俺達のオートレーサーとしての師匠で…『おやつさん』さ」

「悪いね、織斑先生。こいつが毎回毎回迷惑掛けてるみたいで」

「それより何でお前がおやつさんの事知ってるんだよ？」

「私の教え子…篠ノ之箒を『亡国機業』の襲撃から保護してくれたのが立花さんでしたから」

千冬が男性…立花藤兵衛について和也に聞くと藤兵衛は苦笑しながら千冬に謝罪する。

藤兵衛はこの街でバイク屋を営んでおり、篠ノ之箒が『亡国機業』にその身を狙われた際には箒を保護した事からIS学園側から藤兵衛に感謝状を送っており、その打ち合わせの為に藤兵衛の店『立花レーシング』まで何度か赴いている。

ちなみに同行した副担任の山田真耶とは古い知り合いらしく、しょっちゅう話が脱線して打ち合わせは予想以上に長く延びたのだが、どうやら昔真耶を身体を張って助けた和也以上にいい加減というかフリーダムなカメラマン…一文字隼人も関わっているとそれとなく察した為敢えて文句は言わず聞き役に回っていた。

そして千冬は和也からレーサーとしての師匠であり、父親のように慕っている『おやつさん』の話はよく聞かされていた。

「そついう事だ。だから今回は俺が快気祝いって事で奢ってやるよ…俺の行き付けの店だな」

「いや、面目ない、おやっさん。ならお言葉に甘えさせてもらっよ
「ついでに織斑先生も一緒にどうか？ 勿論そちらにも都合がある
だろうけど…」

「いえ、ご一緒させて頂きます。どの道そうするつもりでしたし
「なら決まりだな。それじゃ行こうか、二人とも」

藤兵衛がそう言って歩き出すと和也と千冬もそれに続けて歩き出し
ていた。

「おやっさん行きつけの店が何処かと思えば…まさか『五反田食堂』
だったとはね」

「そう言えば、この前…幽霊騒動の時に一度来た事があったと蔵か
ら聞いてたな」

「と言っかおやっさん、大将とは知り合いみたいだけど…？」

「何、まだやんちゃしてた若い頃には藤兵衛さんによく世話になっ

ててね。しかし弾と蘭を助けてくれた兄さん達が藤兵衛さんの弟子とはなあ……」

昼飯時を大分過ぎ、人が殆どいない大衆食堂『五反田食堂』のテーブル席の一角に滝和也、立花藤兵衛、織斑千冬が座り、厨房から顔を出してきた五反田蔵を交えて話していた。

蔵の話ではやんちゃだった若い頃に藤兵衛にはよく世話になっていたらしく、付き合いは長いようだ。

そして藤兵衛も若い時分には五反田食堂によく立ち寄っており、蔵の父親である五反田食堂の先代店主にも世話になっていたらしく、戦いから身を引きこの街に腰を据えて『立花レーシング』を開いてからは再び常連客として店に通うようになったそうだ。

そこに蔵の孫である五反田弾と五反田蘭の兄妹がやって来て和也に話し掛ける。

「お久しぶりです、滝さん」

「久しぶり…弾君。蘭ちゃんも元気そうで良かったよ」

「いえ、滝さんこそ藤兵衛さんから入院したと聞いてたのでどうなつたかと思いましたが…大丈夫それで良かったです」

そう言って和也と弾と蘭は顔を見合せ笑い合う。

「和也さん…二人とは知り合いなんですか？」

「ああ。お前に頼まれた幽霊騒動の調査の時にちょっと、な」

千冬の質問に和也は簡潔に答える。

セシリア・オルコット暗殺未遂事件解決後は千冬とセシリアに付き添う形で日本まで同行した和也はそのついでにIS学園や周辺の街で話題となっている幽霊の調査を千冬に頼まれた。

千冬の懸念通り幽霊は無人IS…最初にIS学園を襲撃してきたタンプでインターポールなどでは『ドール』と呼称されている…であり、街の近くにある廃墟を拠点としていた。

その際和也は廃墟に赴いていた妹の蘭を探しに行った弾と遭遇しており、弾と協力して無人ISに遭遇、襲撃されていた蘭の救出に成功していた。

「そう言えば滝さんは風見さんが今どうしてるか分かりますか？」

「海外で色々動いてたらしいんだが…最近それに目処がついたみたいでこつちに戻ってくるそうだ。ついでに蘭ちゃんの笑顔がついた日本一の五反田食堂の定食メニューも食いたいとよ」

「そうですか…そんな所も相変わらずですね、風見さん」

そして廃墟で蘭が無人ISに襲撃された際に彼女を保護し一時的行動を共にし、最終的に無人ISを全て撃破したのが和也の後輩に当たる『風見さん』こと風見志郎だ。

その後は盟友の結城丈二と共に『亡国機業』の計画を追ってエジプトやタヒチ、ヨーロッパを転々としていたらしいが、今はインターポール本部を通じて日本に帰国し、2、3日後にはこの街に到着す

るとの連絡が和也に入っている。

「そっか、弾君と蘭ちゃんを助けたのもう一人の方は志郎だったんだな」

そう言っつて藤兵衛は何処か誇らしげに笑う。風見志郎もまた息子同然なのだから当たり前なのだろうが。

そこに店の戸が開き少年が入ってくると弾に声を掛ける。

「弾、席空いて…っつて和也さん！？入院してたんじゃない？？」

「驚くのも無理ないか…お陰でさっき退院出来てね、こうして快気祝いって訳さ」

入ってきたのは千冬の実弟の織斑一夏だった。どうやら弾とは友人らしい。

「何だよ一夏、滝さんと知り合いだったのか？」

「まあな。お前の方こそ和也さんと知り合いなんだな」

「ええ。夏休みの時に風見さんと一緒に私と兄の事を助けてくれたんです」

「しかし驚いたな…まさか一夏君と弾君が友達だったなんてな」

「中学時代からの付き合いなんです…それとあの時はありがとうございました、立花さん」

「気にしなくていいよ。篝ちゃんも元気にしてるかい？村雨良つのに様子見に行くように頼んだんだけど俺に言つの忘れてそのまま海外行っちゃってね」

「はい、お陰様で。というか村雨さん…千冬姉、邪魔なら出ようか？」

「いや、私は一緒の方が何かと都合がいいからむしろ同席しろ。何処かの似非インターポール捜査官の動きも牽制出来て楽だからな」

「まったく、これだからブラコン怪人は…」

「道理で一夏君があんな鈍感になるわけだ…」

そして自分の隣に一夏を座らせる千冬に和也と藤兵衛は溜息を付きながらも再び五反田兄妹を交えて雑談しながら料理が到着するのを待つのであった。

「…今回の件に関するこちらからの報告は以上です」

「お手数をおかけしました、山田先生」

休日の午後にも関わらずIS学園にある会議室の一角で、数人の学園教員と向き合う形で二人の男と一人の女性が椅子に腰掛けていた。

そして教員の一人…山田真耶が報告すると学園校医で男の一人…海堂肇が真耶に頭を下げる。

そして真耶と肇が暫く質疑応答をした後にもう一人の男が口を開く。

「これでヒアリングは全て終了です。今回はご協力頂きありがとうございます」

そうして男もまた教員達に頭を下げる。

「本当、サラも菜月も真耶ちゃんも悪いわね、休日なのに付き合わせちゃって」

「いえ、昨日からヒアリングの準備をされてた緑川先生や海堂先生に比べれば…」

そう言つて真耶はもう一人の校医でありヒアリングに参加していた緑川ルリ子に首を振る。

肇もルリ子も今回は所属する『国際IS委員会』の中でもIS学園に関する事案を担当する『IS学園小委員会』常任委員の一人として先日の無人IS襲撃に関してIS学園側にヒアリングを行っていた。

本来ならば指揮を執っていた織斑千冬からも話を聞くのが筋なのだろうが、ここの所無人IS襲撃や『亡国機業』のIS学園侵入の対処や後始末で働き詰めである事からそれを知る肇とルリ子の計らい

で今回のヒアリングには呼んでいない。

「それに常任委員なんてただの肩書きみたいなものだし…それより光明寺博士こそわざわざスイスからこちらまでお越し頂いてありがとうございますとわざわざいました」

「気にしないで下さい、緑川博士。IS学園小委員会の委員長として当然の事ですから」

そう言つて頭を下げるルリ子に対して男：光明寺信彦は穏やかに笑つて首を振る。

機械工学の第一人者として世界中にその名を知られている光明寺信彦は『白騎士』事件以前：『白騎士』発表直後から『白騎士』及びISに注目しており、『白騎士事件』直後にISを専門的に扱う国際機関設立を唱え、国際IS委員会設立を主導した人物でもある。

現在では国際IS委員会の創立メンバーの中でも重鎮として創立以来国際IS委員会副委員長を務める傍らIS学園小委員会委員長も兼任している。

なお国際IS委員会委員長は慣例として国連事務総長が就任する名誉職に近い扱いであり、事実上副委員長である光明寺が国際IS委員会の最高責任者となっている。

ちなみにルリ子が言っているように国際IS委員会、特にIS学園小委員会のメンバーは月に一度の定例会と何かIS学園に問題が発生した際の緊急召集以外は仕事が無い為意外と暇である。だからこそ肇もルリ子も普段はIS学園の校医を兼任出来るのだが。

とはいえ副委員長も兼任する光明寺は流石に忙しい筈なのだが、立て続けに無人機に襲撃された事やいずれも未登録のコアが使われていた事などの事態を重く見て肇とルリ子の要請に応じてこうしてIS学園まで出向いた。

「それに友人の…緑川弘の娘の頼みを聞かない訳にもいかないしね」
光明寺は笑ったままルリ子に続ける。

光明寺とルリ子の父緑川弘は大学時代の同期であり、機械工学、生化学と専攻は違えど互いに意気投合した親友同士として家族ぐるみで付き合いがあった。

その為ルリ子と光明寺の実娘で、今は父と同じ機械工学者であり国際IS委員会創立メンバーの一人でもある光明寺ミツ子とは幼なじみであり、互いに色々境遇が似ている事もあって今でも無二の親友同士だ。

「しかし光明寺博士、『亡国機業』が貴方の身柄の確保を狙っているとの情報がインターポールから寄せられています…」

そこに肇が口を開く。

光明寺はその学識と立場故に『亡国機業』が付け狙っているという情報がよく入っており、実際何回か狙われた事もあるのだが、護衛を特に付けていないにも関わらず一度も捕まる所か『亡国機業』側にまともな追いかけられた試しはない。

「ありがとうございます海堂博士。しかしまさか先程貴方を乗せていたタクシーの運転手がその光明寺信彦だとは向こうも思わないで

しょうね」

そう言つて光明寺は事もなげに笑つてみせる。

実は光明寺が捕われない最大の理由がこれである。

光明寺は狙われているという情報が入る度に電気屋、警備員、タクシードライバーなど様々な職種の人間に変装しては上手く追跡を躲してきた。

しかもいずれも本職さながらの腕前である為ますます気付かれなさに拍車がかかっている。

一度『亡国機業』側が誘拐しようとして追つ手を差し向けた際に、光明寺が逃げた方向を教えたホットドッグ屋を、後で追つ手を捕まえたインターポール捜査官が事情聴取しようとした際に実はそのホットドッグ屋こそが光明寺本人だった、という事もある。

ルリ子が父から聞いた話によると元々天才肌かつ多趣味で、しかも凝り性だったらしく大学時代から多くの資格や免許を持っていたらしい。

加えて本人は「昔とつた杵柄」と言っているが、色々怖くてルリ子もいったいどんな事があつたのか聞き出せていない。

「それに今回はこちら側も無策という訳ではありませんから」

光明寺は更に続ける。そして教員達や肇とルリ子を促し光明寺は会議室を後にした。

「いいのか？一夏、お姉さんと一緒じゃなくて」

「千冬姉もこの所忙しかったみたいだし、たまには羽を貰いたいからさ。それに俺がいたんじゃまた和也さんと喧嘩始めそうだし」

「…私は滝さんの主張が正しいと思います」

日が西に傾いた頃、IS学園へと続く道を織斑一夏と五反田弾、それに五反田蘭が並んで歩いていた。

一夏に想いを寄せる蘭に対してもあまりに無神経かつ鈍感な言動を繰り返していた為にまたしてもキレた滝和也と織斑千冬とで喧嘩が始まったのだが、今回は立花藤兵衛によりあっさりと鎮圧された。

そして現在和也と千冬は藤兵衛監視の下で罰として五反田食堂の皿洗いをさせられている。

そしてまたしてもいつもの如く口喧嘩を始めた和也と千冬に藤兵衛が再びハリセンを振り下ろしたのを見て一夏は先にIS学園へ戻る事を決め、見送っていく事を申し出た五反田兄妹と一緒にこうして歩いている。

「けど俺は千冬さんの気持ちも分からないでもないけどなあ…悪い

人じゃないのは分かってるんだけどやっぱり弟とか妹に変な事吹き込む人は近付いてほしくないっていうか」

そう弾は蘭に答える。

実際和也は決して悪い人間ではない、むしろ出会って間もない自分達兄妹の為に命懸けで生身にも関わらず無人ISに挑みかかるくらい熱く、優しい男だとは弾は承知しているのだが、千冬の会話を聞いているとどうやら不真面目さやいい加減さは単なるポーズだけではなく元々そんな傾向があるようだ。

少なくとも千冬の前で一夏に歳上が好きなのか聞いてくるような人はいくら暴力を振るってくる妹でも傍には近寄せたくない。一夏以外にそんな事を聞く気はないようだが。

「けど和也さん、前にも生身でISに立ち向かってたんだな…」
「うかお前もだいたい無茶したんだな」

「そんな大した事じゃないって。あの時は無我夢中でさ…な、蘭」

「うん。何か気が付いたらつい身体が動いちゃったと言うか…」

そう言っただけと蘭は笑って答える。

あの時弾は妹が逃げる時間を稼ぐ為に無人ISに挑んだ上に、追い詰められていた風見志郎を助ける為に弾と蘭は和也と共に生身で無人ISに挑みかけたと一夏は聞いている。

正直弾は怖かったが、何だかんだ言ってもたった一人の大切な妹を守りたいという思いや妹を命懸けで助けてくれた志郎、自分に付き

合って命を張ってくれた和也の力になりたいという気持ちが恐怖を上回った。

「それにお前に比べりゃまだまだだしな」

「俺がか？でも俺は…」

「ただIS乗れるだけだ、って言いたいんだろ？」

頷く一夏に弾は続ける。

「確かにIS、しかも専用機持つてるお前は強いつて誰でも分かる。実際白状しまえば俺もお前みたいにISに乗れたら俺だって、なんて思ってた事は何回もあるさ」

「けどお前さ、世界でただ一人IS乗れる男だからってだけで色々余計な苦勞背負い込んで、痛い目見て、一回死にかけた事だつてあつたし、辛い事も苦しい事もその分沢山あつただろ？それでもお前は逃げ出さずにISに乗る事を選んだだろ？」

弾は一夏に続ける。

弾は一夏の同性の友人として一夏がIS学園に行っても接し続けてきた。

だからこそ一夏が世界唯一の男性IS操縦者であるというだけで色々余計な苦勞をしてきた事を誰よりも知っている。

当然だろう。女性からは地位を脅かす者として敵視されるか好奇の視線に曝され、男性からは裏切り者として恨まれ、或いは単にIS

学園という美女・美少女揃いの『女の園』^{ハイレム}唯一の男子生徒というだけで嫉妬、羨望されるのだ。正直、最初は弾も羨ましいと思っ

た。
だが一夏が『銀の福音』^{シルバリオ・ユスヘル}の暴走事故の際に『銀の福音』と交戦して一時意識不明の重傷を負ったと聞いてからその認識が甘かったと痛感した。

ISはどんなに競技用と言い繕っても兵器だ。いくら搭乗者がシルドバリアや『絶対防御』で守られていても、それが人を殺せる力を持った兵器である以上それを使って死人が出ないとは、自分も死なないと言いきれないのだ。

そんな当たり前とも言える事を、弾は身近な友人である一夏が実際に死にかけるまで気付けなかった。

そして無人ISと対峙した時に初めて感じた死への恐怖と、それを感じても、そして女性のIS操縦者にはない余計な苦勞を背負い込んでも尚ISに乗り続ける事を選んだ一夏の強さに気付いた。

そして仮に自分が一夏と同じようにISに乗れたとしても、そんな目に遭ったらISを降りていただろうとも気が付いた。

「そんなお前の苦勞も、強さも知らないでただIS乗れるっただけでお前に嫉妬したり、お前を羨ましがったりするだけの腑抜けがIS乗れてもお前みたいには出来ないって…かく言う俺もその腑抜けの一人だけだよ」

「だからさ、俺はお前みたいにIS乗れなくても…そんな苦勞背負い込まなくていい俺はお前を羨ましいなんて思ったりしないで、泣

き言一つ言わないでISに乗れないなら乗れないなりに頑張る滝さんみたいな男になりたい、って思ってるんだけど…お前の前で白状しちまった時点でまだまだお前にも、滝さんにも、風見さんにも及ばないよな」

そう言っつて弾は苦笑する。

「っつて、ガラにもなく変な事言っちまったな。要は俺も頑張るからお前も頑張れっつて事だ！」

「弾…ありがとな」

そして一夏と弾は笑い合う。

「お兄…ちよつとズルいよ」

それまで口を出さずにいた蘭は羨ましそうに呟く。

そしてIS学園の前に到着すると一夏と五反田兄妹は別れ、それぞれ帰っていった。

「…使えるな。行くぞ」

それを物陰から見ていた怪しげな男が合図を出すと、黒づくめの男達が一斉に五反田兄妹を追って動き始めた。

寮の自分の部屋に戻った織斑一夏は散々6人の少女に荒らされた自分の部屋の後片付けを行っていた。千冬は既に帰ってきており、こちらに一回顔を出した後自分の部屋へと引き上げている。

どうにかして後片付けは終わり、今は外はすっかり暗くなっている。

「これで終わりつと…ドアも鍵が壊れたみたいだしこれから修理申請も出さないとな…」

一夏は溜息を付きながらも次の事を考える。

よく一夏は部屋のドアを始めとする備品類をよく壊される。その大半は朝方部屋を荒らし回った少女達が原因だ。そしてその度に一夏は備品類の修理申請を出してきた。一週間前みたいにベッドまで壊されなかっただけ良かったでしょう。

そんな慣れたくもない事に既に慣れてしまった一夏が修理申請の用紙を取りに行こうと部屋から出ようとした直後に携帯電話に着信が入る。

五反田弾からだ。こんな時間に何の用だろうか。そんな疑問を抱きながらも一夏は携帯電話を開き電話に出る。

「どうしたんだ？弾。何か言い忘れた事でも…」

『織斑一夏だな?』

「…!?!?」

電話から聞こえてきたのは弾の声ではなかった。変声機を使っている為性別は分からないが、少なくとも弾ではない。でなければ変声機を使う事も、相手が一夏本人か確認する事もないだろう。

頭が混乱して言葉を発せない一夏に構わず電話の主は言葉を続ける。

『今我々は君の大切な友人の一人を預かっている。勿論生きたままでな…声を聞けば誰かは電話越しでも分かるだろう…』

そして少しの沈黙の後電話口から声が聞こえてくる。

『一夏か!?!?』

「弾!?!?」

五反田弾の声だった。

「おいどういふ事だよ弾!何がどうなってるんだよ!?!冗談にしちゃタチ悪すぎだろ!」

『冗談だったら俺も良かったんだけどよ…お前と別れて少しした後今俺を捕まえてる連中に襲われて…何とか蘭は逃がせたんだけど俺は捕まっちゃったんだ…』

「弾…」

やがて少し間を置き再び最初の変声機の主が話し始める。

『彼の言う通りだ。我々は彼を預かっている事はこれで理解出来た
だろうか?』

「何の為に弾を!? あんたらは一体なんなんだ!？」

『落ち着きたまえ、織斑一夏。我々としてもこれ以上事を荒立てる
気も、彼に危害を加える気もない。君が我々の要求に従うのであれば
彼は無事に解放しよう。だが君が拒否するのであれば彼の命は保
証しかねる。実に簡単な取り引きだ。では答えを聞こうか?』

何を取り引きだ。ただの誘拐犯の要求じゃないか。しかし今は聞く
より他に道はない。

「…あんたらの要求は?」

『賢明な判断だ、君が話が分かる方で助かるよ。何、君に身代金な
どを要求する気もなければ何か無理難題を押し付けようとか言う訳
ではない…実に単純かつ明快で、簡単な要求だ』

『今から二時間後に君独りでIS学園の北西7kmの場所にあるピ
ル建設現場に來たまえ。君がそのISを持つか持たないかは君の自
由だが、我々としては持つてきてくれた方が何かと都合が良いのだ
がね』

『それとこの事は警察は勿論IS学園の教師や生徒には話さない事
…要するに他言は無用という事だ。もし指定した時間に君以外の人
物が来たり、君に付き添ったり、君を尾行していたりした者が一人
でも居た場合は我々は取り引きが決裂したものと見なして相応の措

置を取らせて貰う』

『実に単純明快で簡単な取り引きだろう？では二時間後に…』

「待て！一体何の目的でこんな事を！？」

『君が知る必要の無い事だ。君には君の都合があるように我々には我々の都合というものがある。君もIS操縦者なのであればそれくらいの分別を持ちたまえ』

『では二時間後にまた会おう。君が我々の要求を聞き入れてこの取り引きが無事に成功し、互いにとって良い結果に終わる事を我々も祈っているよ』

そこで変声機の声は途切れ、電話が切られる。

「ふざけんな…！」

一夏の身体が怒りに震える。あの時と同じだ。まだ小学生だった頃に干冬に自分達の要求を飲ませる為に一夏を誘拐し、あまつさえ干冬の自由と平和を奪おうとした『亡国機業』の連中と同じだ。

許せない。自分一人を巻き込むならまだしも友人の弾まで巻き込んだ事が何よりも許せない。

だが同時にこういった手合いが自分達の要求を聞かなければどんな手段も辞さない事も、そのクセ自分達は取り引きに従う気はハナからないと言う事を一夏は誘拐された時に身に染みて理解している。

あの時のような支離滅裂な人間が他にもいるとは中々思えないが、

このような理由で誘拐を企み、そして実行するような人間がまっとうな神経をしてるとは思えない。

つまり誰かに話せば連中は確実に弾に危害を加えてくる。だが誰にも話さずおとなしく要求に従っても弾を解放するとは限らない。むしろ口封じをしてくる可能性も否定出来ない。

(俺は…どうすればいい？俺は…)

難しい問題だ。思わず一夏は考え込む。

ふと、考え込んでいる時にクローゼットが目に入る。

クローゼットを開けて中から宝物を…本郷猛から貰ったジャケットを取出し、暫く眺める。

「どうすればいいって…決まってるじゃないか…！」

やがて一夏は決心を固める。自分がこれから何をすべきか、答えは最初から決まっていた。後は行動に移すだけだった。

「猛さん…お借りします！」

そして一夏は猛から貰ったジャケットを羽織るとドアを開けて部屋を出る。

その目には、強い決意が宿っていた。

五反田食堂の中で、滝和也と五反田蘭がテーブルを挟んで向き合って座っていた。

今回はいつもと様子が異なりパトカーが五反田食堂の前に何台か止まっており、大将の五反田蔵も自称看板娘の五反田蓮も不安そうな表情を隠さずに警察官と話をしていた。

蘭も例外ではなく、いつもの元気もなく意気消沈し、不安そうな面持ちだ。

和也はそんな蘭に再び口を開く。

「他に君を襲った連中…つまり弾君を拉致した連中の特徴とか覚えてないかい？」

「いえ…あの後はお兄に言われたように振り向かないで必死に走ってたので…」

「そうか…ありがとう。わざわざ辛い事を根掘り葉掘り聞いてごめんな？」

そう言って和也は蘭に謝罪する。

和也が皿洗いを終えて立花藤兵衛と共に『立花レーシング』に引き

上げた直後に藤兵衛を通じて蘭から兄妹が何者かに襲われた事、そして蘭を逃がした弾が戻って来ない事を知らされた和也は蘭に警察に通報するように指示すると同時に五反田食堂へとバイクを走らせました。

そして五反田食堂で通報で駆け付けた警察官に自身の身分といきさつを話し、警察官から目撃情報などから五反田弾が何者かにより拉致された可能性が高いという事を聞いた和也は蘭から事情を聞いていた。

犯人グループから弾の家族に対する連絡は今のところ無い。

蘭の話では犯人グループは皆男性らしく黒ずくめの格好をしており、顔までは帽子を目深に被っていた為見れなかったそうだ。

そもそも何故犯人グループが五反田兄妹を襲い、弾を拉致したのか分からない。

少なくとも五反田兄妹の名前は知らなかったらしく怨恨などの線は薄いだろうが、かと言って営利目的とは思えない。とにかく犯人側からの接触が無い上に分からない事が多過ぎる。

「お疲れ様です、滝捜査官」

「いえ、こちらこそご協力ありがとうございます、速水警部…他に目撃情報などは？」

「いえ、やはり皆同じような事しか…車のナンバー等何かもう少し手掛かりがあれば絞り込めるのですが」

「ええ：或いは犯人グループ単なる素人の誘拐犯ではなくある程度訓練を受けた、しかもかなり組織だった動きをしているようですし」
和也は店に入ってきた警察官の速水と会話を交わす。

蘭や他の目撃者の証言から推測するに、弾を拉致した連中は素人ではない。手際によさから専門的な訓練を受けている事と、その裏にはそれなりに規模が大きい組織が絡んでいるようだ。

そうなるとますます動機が分からない。弾自身は別に特別でも何でもないごく普通の少年だ。そんな組織が拉致などというリスクを伴う行動を取る理由がない。

ほぼ同時にヒアリングを終えてIS学園から出た国際IS委員会副委員長の光明寺信彦博士も誘拐されたという情報が入ってきているが、こちらの方は和也は特に心配していない。

光明寺本人が自身の身柄を狙ってくる事を見越して策を打っていることは和也も承知している。と言うより光明寺の策に和也は協力している。

こちらの方は犯人グループの目星も大体の目的も和也は掴んでいる。

光明寺を拉致したのは十中八九『亡国機業』、もしくはその息のかかった連中だ。そしてその目的も光明寺のその頭脳を組織の為に活用しようなどと考え、あわよくば国際IS委員会やIS学園への牽制しようと言った所だろう。

それにそちらの方はIS学園側も動くようなので、光明寺博士の方は心配いらないだろう。むしろまんまとこちらの策に引っ掛かった

と気付いた時の連中の吠え面が目には浮かぶ。

だから和也にとってはむしろ弾の方が問題だ。何より何だかんだで強い絆で結ばれた罪もない兄妹を引き裂き、織斑一夏の友人を危険に巻き込んだ連中への怒りで腸が煮えくり返りそうだ。

しかし不安そうな蘭の前ではそれをおくびにも出さない。一番辛く不安に思っているのは蘭である筈だ。だからこそ自分は冷静でなければ、少なくともそう振る舞わなくてはならない。でなければ蘭を更に不安にさせてしまうだろう。

「あの、滝さん……」

「大丈夫だ、蘭さん。弾君は俺が必ず助ける。それに、弾君は強い。だから必ず戻ってくるさ」

蘭を慰める和也だが、そこに通信機に通信が入る。どうやら光明寺博士の策は見事に成功したようだ。

和也は一度立ち上がり、店の外に出ると通信に出る。

「こちら滝。どうやらそつちは……何！？本当か！？……ああ。分かった。今すぐそつちに行く」

そして店に戻ると蘭に一言告げる。

「蘭ちゃん、さっき連絡が入った……弾君は無事らしい。今は光明寺信彦博士と一緒に捕まってるそうだが、怪我とかは特にしていないそうだ」

「お兄が！？良かった…」

「安心するのはまだ早いぜ？だからこれから俺が弾君を助けに行ってくる。速水警部、後はお願いで貰っていいですか？」

「お願いします。我々では『亡国機業』関連の事件は手に余りませんから」

そう和也と速水警部が会話を交わすと和也は店を出る。

「お兄を…お願いします！」

そして自分に一礼する蘭に手を挙げて答えてみせると、そのまま店の前に停めてある自身のバイクに乗り込み走り出そうとするが、そこに後ろから誰かが和也に声をかける。

「なあ、俺にも手伝わせてくれないか？弾君の居場所が分かって、これから助けに行くんだろ？」

「…おやつさん」

和也に声をかけたのはバイクに跨がった『おやつさん』こと立花藤兵衛だった。跨がっているのはかつて仮面ライダーが愛用していた『改造サイクロン号』を二個一で修理したものだ。

「足手まといになったりはしないさ。まだまだ衰えちゃいないしな」

「そつちの方は心配しちやいないよ…なら行くこうか」

和也と藤兵衛は顔を見合せ笑い合つとそれぞれバイクのスロットル

を入れて、かつて仮面ライダー達と共にそうしてきたように、弾を悪の手から救い出すべく走り出した。

IS学園の職員室の中に織斑千冬はいた。今は私服姿からスーツへと着替えている。

現在は千冬以外にも他の教員達も召集されて職員室に集まってきたいる。

先ほど入ってきた国際IS委員会副委員長の光明寺信彦博士が拉致されたという情報を確認し、それがほぼ確実であると判明した為だ。本来ならば学園外での出来事である為警察に任せておいてもよいのであるが、よりによって拉致されたのが光明寺がIS学園へのピアリングを終えIS学園の敷地外へと出た直後である為に流石に今回ばかりは体面にも関わるので、IS学園側も解決に向けて動き出しており、現在職員達が情報収集に当たっている。

もつとも、これを見越していた光明寺はあらかじめ対策を立てていた為特に心配する必要はないのだが、それでもIS学園の前で要人が拉致されるという事実そのものがむしろ問題である為にこうして千冬も職員室に詰めている。

「おかしいわね…やっぱり一つ足りないわ…誰かが持ち出したのかしら?」

そこに首を傾げながら一人の教員が職員室へと入ってくる。

「佐原先生、どうかされましたか?」

「織斑先生…いえね、さつき格納ハンガーから予備用のバイザー型ハイパーセンサーがいくら数えても一つ足りないんですよ」

千冬は入ってきた教師…IS学園整備科主任教員の佐原ひとみに声をかける。

先ほどひとみはISがいつでも出撃出来るように格納ハンガーでISの整備と部品の点検を行う為に職員室から出ていた。

ひとみの話では本来その機体のハイパーセンサーが修復直後等の理由で稼働に不安が残る際に本来のハイパーセンサーの補助や保護の為に使われる共通規格のバイザー型ハイパーセンサーが一個足りていないそうだ。

そもそもそんなものは殆ど使われた事もないので教員の中には存在自体を失念している者すらいる。ひとみが気付いたのは最初期からIS整備士としてISに携わってきた故だろう。そこに整備科教員の一人がひとみに声をかける。

「あの、それならさつき持ち出し許可の申請書出てましたよ?」

「それを先に言ってよ…誰が持ち出しの申請を?」

「ちよつと待つて下さい…あ、ありました。えっと、1年1組の織斑一夏君、ですね」

「織斑が…ですか？」

「ええ。確かに申請書も出てますし」

意外な…実弟の織斑一夏の名前が出てくると千冬は思わずその教員に聞き返すが、申請書を見せられると確かに織斑一夏の名前がそこに記載されていた。理由は本体ハイパーセンサーに不調が見られた為となっている。

「けど何か匂うわね…織斑先生、申し訳ありませんが織斑一夏を職員室まで連れてきてくれませんか？少し聞きたい事があるので」

「分かりました。少し見てきます」

ひとみの要請を承諾すると、千冬は立ち上がり職員室を出て寮の織斑一夏の部屋へと歩いて行く。

そして部屋の前まで千冬が到着すると、一夏に想いを寄せている少女達が部屋の前にたむろしていた。

始めはいつものようにどういう手順で部屋に乗り込むか相談している、或いはいかに他のメンバーを出し抜くか考え互いに牽制し合っているかと思つた千冬だが、やがていつもとは少々様子が異なることに気付く。

「お前達、一体何をしている？」

「織斑先生……」

千冬が見かねて声を掛けると皆が千冬の方を見る。そして篠ノ之箒が少女達を代表するように口を開く。

「あの、一夏が何処に行ったか分かりませんか？」

「織斑を？」

「ええ、先ほど部屋に入ったのですが居なくて……心当たりのある場所は皆で探したのですが見つからなくて」

千冬は箒の言葉を聞くと暫し考える。一夏がこの時間帯に部屋にいない事は珍しい。しかも箒達のようにそれなりに一夏とは長い付き合いの面子が心当たりを探しても見つからないというのはそう滅多にある事ではない。

その事に不審を覚える千冬だが、それも校内放送が流れると思考を中断する。

『織斑先生！至急職員室までお戻り願います！先程学園の北西7kmの地点でIS同士の交戦が開始されたという情報が入りました！』

「何!?!」

千冬は驚愕しながらも何か嫌な予感を抱く。しかしそれをすぐ抑えると専用機持ちでもある少女達に指示を出す。

「お前達も命令があり次第すぐに出撃出来るように準備しておけ！」

それだけ言つと千冬は職員室へと戻るべく駆け出していた。

IS学園より北西7kmに位置するビルの建設現場。IS学園から程よい距離にあるこの一帯はIS学園設立後多くのIS関連企業がIS学園からのデータをより円滑かつダイレクトに収集出来るように各社の現地事務所や営業所、支社が軒を連ね、それに伴いビルの新築や解体、改装等が盛んである。

そんな新築途中のビル建設現場にISを装着した女が佇んでいた。今立っている女の他にも同じようにISを装着している女が10人この近くに潜んでいる。

そして建設現場に立っている女はハイパーセンサーの情報を一瞥しながらも時刻を見て通信を入れる。

「そろそろ時間ね…どう？誰か来る気配は？」

『今のところは無いわ』

『本当にあの織斑一夏は来るのかしら？』

「一見そうは見えなくてもかなり頭に血が上りやすい上に情に脆いとプロフィール結果では出てるわ。友人が捕われたのならきつとこちらに来るでしょうね」

女は他の女達の疑問に答える。

ここにいる女達は二時間程前に織斑一夏に電話を掛けてここに来るように人質を利用して呼び出したグループの一味である。

勿論女達は一夏との取り引きに：人質の解放に応じる気など八ナからない。むしろ最初から口封じも兼ねて始末する腹積りだ。

『けどまあ幹部会も織斑一夏つてのに随分とご執心じゃないか：これまでではむしろ命を奪いにかかったのに今じゃ生け捕りにしろって話じゃないか』

『モルモットにでもする気かねえ：おかげで私たちはわざわざ光明寺信彦だけじゃなくてもう一人誘拐なんて手間掛ける必要が出てきたんだからたまったもんじゃないよ』

通信ごしに女達の愚痴が聞こえてくる。

女達は組織の方針を決定する『幹部会』の命令を受けて世界最初の男性IS操縦者である織斑一夏と機械工学の世界的権威で現在は国際IS委員会副委員長の光明寺信彦博士の身柄の確保を命じられた。

光明寺の方はIS学園の敷地から出てきた所を待ち伏せして割とあっさりと捕まえる事が出来たが、IS操縦者、しかも専用機持ちである織斑一夏をIS学園前で学園側に気付かれずに確保するのは難しい。

そう判断した女達の一味は直接一夏を拉致するのを諦めて一夏と話していた兄妹らしき二人を拉致し、一夏に対する人質とする事にした。

妹と思しき少女にこそ逃げられたが、兄と思しき少年はこちらで捕える事に成功しており、現在ではこことは別の場所で光明寺信彦共々監禁している。

とはいえ女達も光明寺はともかく単に男性のIS操縦者、しかも一度は殺そうとすらした織斑一夏を急に必ず生かして捕えると言われた事に困惑している。

だが幹部会の命令は絶対であるのでこちらとしては従う他にない。

それでも誘拐という手段を使うのにはそれなりにリスクが伴う。特にほぼ同時に二人誘拐してしまうとどちらか片方、或いは両方を探られると一気にボロが出かねない。

そしてそのしわ寄せは現場で動いている女達『実働部隊』に来るのだからたまったものではない。

ましてやこの近くには世界各地から各国の代表もしくは代表候補生が生徒として集まり、教員にも一夏の実姉で『ブリュンヒルデ』として知られる名実共に世界最強のIS操縦者である織斑千冬を筆頭に元国家代表もしくは代表候補生クラスが何人もいるIS学園の近くなのだ。

下手に事を荒立てれば確実にIS学園側が黙ってはいないだろうし、インターポールだってこちらの動きを嗅ぎつけてくるだろう。

だからこそ一夏には他言無用と念を押しておいた。聞かなかった場合に備えてちゃんと逃走手段やルートは確保してあるが。

しかしそろそろ時間だと言つのに織斑一夏がこちらに来る気配は無い。怖じ気付いたのであるうか。

「これは一度脅しを掛けた方が…」

「その必要はない」

女が呟くのを誰かの声が遮る。女やその仲間の声ではない。

そして建設現場にジャケットを着た少年がこちらに向かつて歩いてくる。こちらからでは顔が陰に隠れていて見えない。正体は何となく予想が付くが。そして少年は口を開く。

「弾は…五反田弾は何処だ？」

「残念だけど此処にはいないわ…そして貴方が会う事もないわ…おとなしく私達と一緒に来てもらおうわよ？抵抗しても構わないわ…力尽くで連れていくから」

女が合図すると10人も隠れていた場所から飛び立ち、並び立つ。こちらは11機、相手は1人、いくら専用機持ちとは言っても数が違う。これならIS学園側がこちらの動きを察知してISを差し向けてくる前にケリを付けられる。

そんな事を思案している女達を余所に少年は口を開く。

「やっぱり取り引きとか言って最初からそんな事する気は無かったんだな…！」

「ええ、勿論。だったらどうするのかしら？」

「だったら…力づくで聞き出すまでだ！」

すると少年もまたISを展開し装着する。胴体部分はデータ通り少年…織斑一夏の専用機『白式』のものだ。だが顔面部分が違う。漸く見えた顔面部分には…

「…仮面？」

仮面…バイザーが装着されていた。バイザー型のハイパーセンサーも無いことはないが珍しい。第一データでは『白式』のハイパーセンサーがバイザー型であるとの記述はない。

その為、女は一応目の前の少年の名前を確認する事にした。

「一応聞いておくわ…貴方、名前は？」

すると少年は刀を構えて女達を見据えて、言い放つ。

「俺は…仮面ライダー！」

「そう…私たち『亡国機業』の前でその名前を名乗るなんていい度胸ね、織斑一夏…けど、此処までよ！」

そして女達と少年…織斑一夏はほぼ同時にスラスタを噴かして相手に突撃していった。

IS学園の北西に位置する建設途中のビル群の一つ。その前に二台のバイクが止まる。そしてバイクから二人の男が降りると、ビルの内部へと入り込む。

「このビルで間違いないのか？」

「念のため発信源も調べてみたけどここで間違いないよ、おやつさん」

そしてビルに侵入した男の片割れ…立花藤兵衛の問いにもう片方…滝和也は答える。

ある人物からの通信により五反田弾と光明寺信彦がこのビルの一角に監禁されていると知った和也と藤兵衛はこのビルへと侵入し、犯人グループを鎮圧しつつも一夏と光明寺を救出する事にした。

和也も藤兵衛もこういう事は仮面ライダーと一緒にシヨツカ相手についてやってきた事だ。アジトならまだしもこんなビルくらいなら侵入するのはお手の物だ。

そして手早く部屋を探し階段を登り先に進んでいくと、やがて階段

の前に犯人グループの一員らしき男達が何人かいる。背後に立っているこちらにはまだ気付いていないようだ。耳を澄ませた所この男達以外にこの階には犯人グループはいなさそうだ。

ならばと和也と藤兵衛は物音を立てないように男達の背後ギリギリまで迫ると手始めに一番手近な二人に手刀を叩き込み声を上げる間もなく気絶させる。

「何だお前達は!？」

いきなり起こった事態に男達は混乱し、和也と藤兵衛に為す術なく殴られ、蹴られ、投げられて次々と気絶していく。

「こいつら!」

残る一人はナイフを抜くとそのまま藤兵衛を刺そうとナイフを突き出す。

「そうは行くかってんだ!」

しかし藤兵衛はその突きをあっさりといなすと逆にその腕を取り一本背負いで地面に叩きつけ、男を気絶させる。

「侵入者だ!武器を使って構わん!必ず排除せよ!」

すると騒ぎに気付いたのかトンファーやらナイフやら警棒やらで武装した男達が飛び出してくる。どうやら少々派手にやり過ぎて気付かれたらしい。

しかし和也にも藤兵衛にも微塵の恐れも無い。むしろわざわざ捜し

出して叩きのめすよりはこの場で全員相手にした方がだいぶ楽だ。

「流石に少し多いか？」

「俺はまだまだ大丈夫さ…おやつさんは？」

「俺もこれくらい！」

「だったらさっさと片付けて先に進みますか！」

そして和也と藤兵衛は男達に対して臆する事なく敢然と並んで挑みかかっていった。

五反田弾はビルの内部にある部屋の片隅で光明寺信彦と名乗る男と共に鎖で後ろ手に縛られた状態で放置されていた。

弾は織斑一夏に無理矢理電話で話させられた後、光明寺という男が先に閉じ込められていたこの部屋に監禁されていた。その際に光明寺とも簡単な自己紹介を済ませている。

先程から妙に外が騒がしいが、こう縛られていたのでは弾も光明寺も動くに動けない。

「光明寺さん、何が一体どうなっているんですかね…？」

「分からないが…私たちへの見張りすら残さずにどこかに行ったという事は何か重大な事態が…それこそ我々の方に人を割いている余裕すら無いようなかなり重大な事態が発生した、と考えるのが妥当だろうね」

「重大な事態、ですか？」

「ああ。例えば何者かがこのビルに侵入した…しかもただの侵入者ではなく相当の強さを持った、かつこの場所に当たりを付けて故意に侵入してきた者だろうな」

「強くて…故意に…まさか!？」

「或いは我々を救助に動き出した警察かIS学園関係者がインターポールか…とにかく此処からでは情報が少なすぎて私には判断しかねるな」

弾の問いに対しても光明寺は冷静に答える。元々機械工学博士だと自己紹介の時に弾は光明寺から聞いてはいるがそれにしてもこんな状況であるにも関わらずかなり冷静である。

「けど思うんですけど…光明寺さん、妙に冷静じゃないですか？俺なんかまだ状況がよく分かんないというか頭が混乱しててついてけないというか…」

「これでもこういう事には慣れていてね…むしろこんな状況なら君の反応の方が当たり前だよ」

「光明寺さん、本当にただの機械工学者なんですか？場慣れしてるって一体…」

「こちらも少々事情があつてね」

光明寺に対して素直に疑問を口にする弾に対して光明寺は苦笑しながらも特に気を悪くした様子もなく答えてみせる。

そこに足音が聞こえてくる。光明寺と弾は目配せして会話を打ち切ると、直後に弾と光明寺を拉致してきた犯人グループの男数人が乱暴に扉を開けて部屋に入ってくる。

そして弾と光明寺を鎖で後ろ手に縛られた状態のまま立ち上げさせる。

「これは一体どういう事かね？」

「質問に答える義務はない！おとなしく一緒に来てもらおうか！」

光明寺の質問を無視して犯人グループは縛られた光明寺と弾をそのまま引つ立てて歩き始める。

「変な事を喋るなよ！その時は二人共命は無いと思え！」

「…私の命まで奪ってどうする気だね？生け捕りにするように命令されているのだろうか？」

「黙れ！だったら先にこいつの首から掻き切つてやろうか！」

興奮状態になっている犯人グループの一人に冷静に指摘する光明寺だが、男が弾の首にナイフを突き付けると黙り込む。

どうやら光明寺の言った通り状態がかなり切羽詰まっているようだ。でなければ弾はともかくわざわざ誘拐までしてきた光明寺まで脅しとはいえ殺すなどとは言わないであろう。それくらいは場慣れしていない弾でも分かる。或いは光明寺が妙に冷静なお蔭でまだこちらも冷静さを保てているというのもあるのかも知れないが。

そうこうしている内に犯人グループが立ち止まり、弾と光明寺も立ち止まる。

「この…っわ！」

そして廊下の突き当たりにある壁に犯人グループの一員らしき男が吹っ飛ばされて叩きつけられ気絶するという光景が弾の目に飛び込んでくる。

「連中め！もう此処まで来たか！」

「駄目だ！他の者と連絡が取れない！もうあいつらにやられたみたいだ！」

「慌てるな！何の為にこいつらを連れてきたと思っている！？まだこちらには人質がいるのだぞ！」

犯人グループが喧しく騒いでいる間に先程男を吹っ飛ばしたと思しき二人が廊下の角を曲がってこちらに姿を見せ、こちらに向かつて歩いてくる。どちらも男性だ。そして弾には二人共見覚えがあった。

「滝さん！藤兵衛さん！」

歩いてきたのは滝和也と立花藤兵衛であった。犯人グループが身構えている辺り、和也と藤兵衛はここに弾と光明寺が監禁されていると嗅ぎ付けてここに侵入し、存分に暴れ回っていたのだろう。にも関わらず和也はともかく藤兵衛も無傷なのは弾も少し驚いているが。

そして和也は犯人グループに歩み寄ると口を開く。

「全く、まさか『亡国機業』が光明寺博士だけじゃなくて弾君まで拉致を計画して実行までしてやがったとはな…ご苦労な事だぜ」

「貴様：何者だ！？何故我々の事を知っている！？」

「自分から正体明かしてくれてありがとうとよ。お礼と言っちゃなんだが：俺はこういう者だ」

そうやって和也は身分証を取り出して犯人グループに提示して言い放つ。

「こいつを見れば分かるように通りすがりのインターポール捜査官さ。お前達の仲間はもうみんな叩きのめしてある…無駄な抵抗は止めて大人しく弾君を解放しろ！」

「ふん！貴様こそ自分の立場が分かっているのか！？此処を嗅ぎ付け此処まで来たのは誉めてやるが：こちらにはまだ人質が：こいつと光明寺博士がこちらにはいる事を忘れるな！」

しかし犯人グループは慌てずに和也の前に弾と光明寺を押し出すよ

うにして立たせる。

「すみません、滝さん…また迷惑かけちゃって…」

「気にするな、弾君。むしろ蘭ちゃんを逃がす為に戦ったんだろ？だから俺は君を誇りに思ってるくらいだ…だから俺も頑張ってる。つらを叩きのめさないとな」

「滝さん…でも光明寺さんも…」

「何言ってるんだい？弾君」

弾が光明寺について言及すると和也はニヤリと…犯人グループに対してしてやったりと言いたげに笑ってみせる。

「君の隣にいるのは光明寺信彦博士じゃないぜ？」

「えっ…?」

「な、何を馬鹿な事を!？」

「狼狽えるな!これはヤツのハツタリだ!」

あまりに意外な和也の一言に弾や犯人グループは混乱する。光明寺は黙りこくつたままだ。

「そのようなハツタリが通用する程甘くはないぞ!いくらインターポールと言えどもそのような嘘など…」

「ハツハツハツハツ!」

しかし光明寺はおかしそうに大笑し始める。

「何が可笑しい!?!光明寺!」

「光明寺?違うな…俺は小野寺さ!」

そして光明寺…いや光明寺に変装していた小野寺を名乗る男はそれまでとは一転して若々しい声で犯人グループに言い放つ。

そして自分を拘束していた鎖を力づくで引きちぎると啞然としている犯人グループを瞬く間に叩きのめし、全滅させる。

全員が沈黙した事を確認すると小野寺なる男は顔部分やスーツに手を掛け、変装を取り払う。

「悪いな、こんな手間かけさせちまって」

「しかしまさかこんな手を使うとはなあ…最初に聞いた時は俺も驚いたが実際やってみると案外上手くいくもんだ」

和也と藤兵衛がそれぞれ声を上げる。

「すまない、弾君。悪気は無かったんだが君を騙す形になってしまつて…」

そして弾の目の前には光明寺ではなく変装を解きジャケット…いわゆる『革ジャン』姿の男が、優しげでどこか『太い』笑みをたたえ

ながら立っていた。

満月が闇夜を照らし出しているビルの建設現場上空で、12機のISが激闘を繰り広げていた。1機は仮面：バイザーを頭に装着した白い機体、残る11機は素顔が晒されている黒い機体だ。

白い機体：織斑一夏の装着する『白式』は『亡国機業』側のIS11機を相手に単身奮戦していた。

「クツ、こいつガキのくせに…しつこい！」

女の一人が苛立ちながらもアサルトライフルを構えて一夏に向けるとフルオートで乱射する。

「当たるか！」

しかし一夏はスラスターを駆使して銃弾を躲すとそのまま銃撃を放った敵へと接近し、手に持った刀剣型の近接武器『雪片式型』を構える。

「墜ちろよ！」

そして渾身の斬撃を銃撃を放った女へと食らわせ、そのまま地面へと叩き落とす。

「やるわね！けどこれなら…！」

しかしその隙に別の1機が近接ブレードを振りかぶりスラスタを噴かしながら一夏へと突っ込んでいく。

しかし一夏は慌てずにスラスタとバッシュ・イナーシャル・キャンセラーPICを使いその女へと向き直る。

そして左腕の多機能武装腕『雪羅』のエネルギー刃のクローを発生させる。但し左拳を握り、クローのエネルギーを拳に纏うような形にして、だ。

そして突っ込んできた敵が一夏に強烈な一撃を加えようと近接ブレードを振り上げた瞬間、一夏は敵のから空きとなった胴体に敵の突進の勢いを利用したカウンターで左正拳突きを放つ。

「ライダー…パンチ！」

すると自身の突進の勢いまでプラスされたエネルギーを纏った一夏の左ストレートがまともにカウンターヒットする形となり、その女もまた『絶対防御』を発動させながら地面に落下し、叩きつけられる。

「どつした！これで終わりか!？」

そして一夏は残る9人の女に…自身の友人である五反田弾を危険に晒した悪へと咆哮する。

「生意気言うわね…けど貴方の戦闘データは既に収集済みなのよ…
『フォーメーショントルネード』でいくわよ！」

そうリーダー格の女が言うのと9機のISは一夏から距離を取るとスラスターとPICを駆使して一夏を取り囲むように…その名の如く竜巻の如く円を描くように旋回し始める。そして高速で周回しながら一夏に対してアサルトライフルやロケット砲などで一夏に集中砲火を加える。

「ぐっ…」の！」

「無駄よ！貴方の飛び道具は荷電粒子砲しかない事も、それがシールドエネルギーをかなり消費するものだとも知ってるわ！諦めなさい！」

必死に回避し、防御する一夏を嘲るように女が言い放つと、更に砲火は激しさを増す。

「飛び道具なら他にも…あるさ！」

だが一夏は諦めずにやがて旋回のタイミングが一定であると読むや『雪片弐型』を1機に投げ付ける。

「悪足掻きを！」

投げ付けられたISは咄嗟にアサルトライフルを盾にして『雪片弐型』を防ぐ、銃身を貫かれたが、本体にはギリギリ到達していない。

「所詮ガキの浅知恵なんてこんなものか！」

しかし、動きが止まってしまった事が命取りとなった。

一夏は『雪片式型』が敵が盾にしたアサルトライフルに突き刺さった瞬間にスラスターを噴かして突撃していた。そして直後に飛び蹴りの体勢に入り、出力を脚部に回して蹴りを放つ。

「ライダー…キック！」

一夏が放った蹴りは敵ISと垂直になる形でアサルトライフルに突き刺さった『雪片式型』へと蹴り込まれ、その勢いが乗った『雪片式型』の先端が杭の如く敵ISへと直撃し、一撃で撃墜する。

「やるわね…けど隙だらけよ！」

そこに左腕にパイルバンカーらしき武装を装備したISが接近し、無防備となった一夏へ向けて杭を放つ。

「!?!」

必死にスラスターとPICを駆使して回避しようとする一夏だが、躲し損ねて頭部のバイザー型ハイパーセンサーが破壊され、素顔が晒される。

「今よ！」

更に体勢が崩れた一夏に苛烈な集中砲火が加えられる。

「うわあああああ!?!」

防御も回避も出来ずに集中砲火を受け続けた『白式』は絶対防御を
発動させながら地面へと落下し、叩きつけられる。そして展開が解
除され、待機形態であるガントレットに戻る。

「く…くそ…がつ!？」

地面に仰向けに倒れながらも立ち上がるうとする一夏だが、ISを
装着したままのリーダー格の女に踏み付けられ、地面に張り付けら
れる。

「全く、手間掛けさせちゃって…おいたが過ぎたわね、織斑一夏。
そうそう、貴方の友人…確か…五反田弾でしたっけ？さっき彼を預
かっている私の部下達から連絡があったの…」

「命令通り始末した、ってね」

「弾…が…？」

一夏の頭の中が真っ白になる。自分が守ろうとした…助けようとした友人が…

「そう、死んだの」

女はそれを嘲るように言い放つ。

「嘘だ…嘘だ…」

「生憎嘘は付かないわ。だって殺したのは他にもない貴方じゃない」
放心状態の一夏に対して女は笑いながら続ける。

「俺…が…？」

「そう、貴方がよ。貴方が抵抗しなければ、貴方が私達に従ってれば…いえ、もっと言えば貴方がISに乗れない普通の男であったなら、いつそ貴方が生まれてこなければ彼は死ななかった。原因は他にもない貴方よ？」

「そんな…俺は…ただ…弾を…みんなを…守りたいって…助けたい…って…」

「守る？助ける？笑わせないでよ！こうして地面に不様に這いつくばってる貴方に誰を、何を守るのかしら？貴方、自分の命すら守れるかも怪しいくらい弱いなのよ？そんな貴方に他の何かを守るなん

て、他の誰かを助けるなんて出来る訳ないじゃない！その身の程知らずが貴方の友人を殺したの、お分り？」

しかし一夏は答えない。答えられない。

（何が…守るだよ…何が…助けるだよ…俺は…弾を…守れなかった…助けられなかった…そんな俺が…弱い俺が…誰を…何を…守れるんだよ…）

情けなさど無力さから自然と目から涙が零れてくる。

そしてあの時本郷猛から聞いた言葉の意味を思い出す。

（…そうだよな…人は一人じゃ…弱くて…脆いんだよな…俺が…弱くて…当たり前じゃないか…いつも…今みたいに…一人で意気がつて…突っ走って…そんな俺が…強くなれる訳…ないよな…）

そして今度は申し訳なさで一杯になる。また猛さんの言い付けを守れなかった。また、猛さんが自分を信じてくれた心を裏切って…守れなかった…。

「ごめんなさい…猛さん…ごめんなさい…」

自然と謝罪の言葉が口から洩れてくる。

「あら？泣いてるの？さっきまでの威勢はどうしたの？情けないわね…ま、負け犬の貴方にはそれがお似合いね。けど大丈夫よ？私達が貴方を強くしてあげる。守る事より壊す方が楽でいいわよ？だから…おとなしく一緒に来なさいな」

そして女は抵抗する気力を失った。助けを求める声を上げる力すら残っていない。夏を連れていこうと足を退け、手を伸ばす。

しかしそいつは、嵐と共に…まるで嵐のように突然やって来る。

例え助けを求める声すら上げられなくとも、悪に自由と平和を踏み躪られそうになった時…そいつは疾風の如く現れる。

「何!？」

突然走ってきた一台のバイクがISを大きく跳ね飛ばす。女は咄嗟にスラスターを噴かして体勢を立て直す。他の者も一旦後退して乱入者から距離を取る。

乱入者は一夏を守るようにバイクに跨がり、女達の前にいた。ジャケツト姿の男だ。顔はこちらからは影になって見えない。

そして男は女達を無視してバイクから降りると、一夏の目の前に立ち、何とか身体を起こした一夏の目線に合わせるようにしゃがみこむと、穏やかに語り掛ける。

「すまない、遅くなった…立てるか？一夏君」

一夏にはそれが誰だか分かった。かつて自分を助けてくれた…自分と姉の自由の平和を守ってくれた仮面の男…それは…

「…猛さん！」

「…ああ、久しぶり。大きくなったね、一夏君」

一夏の前にはあの時と同じように優しく、しかしどこか『太い』あの笑みを浮かべた男…本郷猛がいた。

(やはり一夏君は優しく、強い子だ…あの時と同じように)

本郷猛は自分の目の前で泣きじゃくっている織斑一夏を見てそう思

う。

事のあらましは予め聞いている。きっと友人の五反田弾を助ける為に、彼の自由と平和を守る為にこうして独りで敵と立ち向かっていたのだらう。

とはいえいつまでも泣かれたままというのはやはり堪えるものだが。

そして一夏は泣きながら猛に謝り続ける。

「ごめんなさい…猛さん…俺…僕…また…また猛さんの言い付け…守れなくて…」

しかし猛は優しく笑ったまま続ける。

「確かに君は今まで一人で頑張ろうとし過ぎたのかも知れない…一人で何でもやろうとし過ぎたのかも知れない…けど、君はそれに気が付いた。だから、これからはそれを直していけばいい。やり方を焦り過ぎただけで、君の気持ちは…君の誰かを守り、助けたいと思う気持ちは間違いなんかじゃないさ。俺が…保証するよ」

「で、でも弾を…」

「…人を勝手に殺すなんての…」

そこに一人の少年が歩いてくる。

「ほら、足もちゃんと付いてるから幽霊じゃないぜ？だから泣くなよ、一夏。何かもの凄くばつが悪いというか…」

そう言つて少年…五反田弾は頭を掻く。

「弾…お前…」

「馬鹿な！？何故生きている！？」

「悪いな、ちよつとした手違いつて奴さ」

そこにジャケット姿の男も姿を現す。

「滝…和也…さん…？」

「すまん、一夏君。連中が今おねんねしてる部下達に通信催促してきたからつい『全てご命令通りに行つてます』つて答えちまつてさ。まさか弾君を始末しろなんて『ご命令』が出てたなんて思わなくてよ」

「全く…お前つて奴は…そういう訳だから弾君は俺達が無事助け出したつて訳さ」

更に立花藤兵衛が歩いてきて続ける。

「なんだと…ならば光明寺は…光明寺信彦はどうした！？」

「さて、光明寺さんなんて居たっけかな？人違いじゃないかな…なあ、『小野寺』さん」

「そうだな、俺と弾君以外に捕まっていた人は居なかつた」

そう言つて和也と『小野寺』こと猛は女達に対して不敵に笑う。

「まさか…嵌められた…!？」

「今さら気付いても遅いぜ、間抜けが。本物の光明寺博士は今頃インターポール捜査官に護衛されながらスイス行きの飛行機の中だろっよ」

そう和也は女達に言い放つ。

光明寺と和也が立案した策とは実に単純な『替え玉』だ。ヒアリングが終わるくらいの時間帯に光明寺に変装した猛がいかにも学園の敷地から出てきたように装いながら囷として『亡国機業』の目を引き付け、その隙に本物の光明寺が学園から無事に帰るというもので、作戦は見事成功し、まんまと『亡国機業』は囷の猛を捕らえ、本物は目も付けられる事もなくその場を後にした。

ちなみに光明寺は猛が捕まってから少し後に学園に出入りしていた清掃業者に変装し、それに紛れて学園を離れインターポール捜査官と合流した。

「とはいえ弾君まで拉致されたのは予想外だったかな」

更に和也が付け加える。

本来ならば猛は敵の本拠地に連れていかれたらまず和也に場所を連絡した後は一暴れして犯人グループを鎮圧する予定だったのだが、そこに一般人である弾まで拉致されてきた事で下手に暴れて弾に危害が及ぶ事を懸念した猛の提案で、和也が陽動してその隙に脱出する手筈になっていた。おやっさんこと立花藤兵衛まで加わり予想以上に派手に暴れた為結局全く違う形での脱出となったが。

そして通信機を逆探知して場所を捜し当てた所丁度一夏がピンチであつた為先行していた猛がバイクで体当たりをかまして…現在に至る。

「猛さん…和也さん…立花さん…弾…」

「一夏君、俺と一緒に戦おう…奴らと…君と弾君の自由と平和を壊そうとした、悪と」

「で、でも…俺…」

「一夏…歯食い縛れ！」

猛に言われても迷う一夏の頬を弾が思い切り殴る。そして続ける。

「目、覚めたか？」

「弾…」

「そんないつまでもウジウジすんなよ、お前らしくもねえ。いつものお前なら俺に言われなくたって、むしろ俺や本郷さん、滝さん、藤兵衛さんが止めたってあいつらに突っ込んでくたさる？それが、お前…織斑一夏なんだから」

「それによ、お前、俺の事守る為に今まで独りで必死に戦ってくれたんだろ？…ありがとう、一夏。俺の為にこんなになるまで頑張ってくれて」

「だからついと言っちゃなんだけど…俺や滝さんや藤兵衛さんの

為にも、俺達の代わりに本郷さんと一緒に戦ってくれないか？俺は強くないしIS乗れないけど…俺もIS乗れない腑抜けなりに頑張るからさ」

「俺からも頼む、一夏君」

続けて和也が一夏に語り掛ける。

「俺は一夏君や弾君が思ってる程強い男じゃない…本郷や一文字達の辛さや苦しさを分かってても、俺も改造人間だったらって思った事なら何回もある。今みたいにこんな辛い目に遭っているって理解してても一夏君みたいにISに乗れたらなんて考えた事だっただけ」

「俺はそんな本郷や一文字、一夏君には到底及ばない腑抜けの一人さ。けど…いや、だからこそ俺はせめて魂だけでも本郷達や一夏君と同じでありたいんだ。確かに俺は力のない生身の人間で、ISに乗れねえ男で…腑抜けの一人だ。それでも人間として、男として、腑抜けとして足掻き続けていくのが腑抜けなりの筋ってもんだと俺は思ってる」

「だから一夏君、頼む。君には本郷と一緒に戦える力が…強さがある。俺も腑抜けの一人としてこれからも、最後の最後まで足掻き抜いてみせる。それが何の慰めになるかは分からないけど…一夏君も一夏君が今出来る事をしてくれないか？」

「和也さん…」

「俺からも…頼んでいいかな？」

「立花さん…」

更に藤兵衛が続ける。

「猛は…本当は口数こそ少なかったけど…明るく、陽気で、素直で…子供みたいな奴だったんだ。でも改造人間にされて…」

「猛は本当は強くない。むしろ弱い一人の…君と同じ一人の人間なんだ。仲間を求めて、後悔して、我慢して…けど誰かに支えられて、助けられて、応援されて…一緒に戦ってくれたから強くなれたんだ」

「だから一夏君、ISに乗れて…猛の隣で一緒に戦える力を、強さを持つている君が猛と一緒に戦ってくれないか？俺も生身の人間だけど…君や猛には及ばないけど、力になるよ」

「それに」

最後に猛が口を開く。

「君は強いさ、あの時俺を信じて、支えて、助けて、応援してくれ…俺に強さを与えてたんだ。君は、強い」

「それでももし君が強くなりたいと、誰かを守りたいと思えば、願うなら…俺が君を信じて、支えて、助けて、応援するよ…俺があの時、君にそうされたように」

「だからもう一度聞くよ…俺と一緒に戦ってくれないか？」

暫しの沈黙の後、一夏は笑顔で答える。

「…はい…」

「…いい返事だ」

そして猛も笑い返すが今まで蚊帳の外に置かれていた女達が騒ぎ出す。

「私達を無視するとはいい度胸ね？けど高々二人に、しかも片方は生身の人間なのに私達を相手にして勝てると思っているの？『ISを倒せるのはISだけである』って言葉を…」

「…黙れ！」

しかしそれまでとは一変して静かな…しかし凄まじい怒気を発して睨み付けてくる猛の前に沈黙を余儀なくされる。

猛は一步前に進み出る。

「『亡国機業』…多くの人々を苦しめ、その自由と平和を奪い、そしてこれからもそうする事を望むお前達を…何より一度ならず二度までも一夏君の優しさにつけ込み…一夏君とその大切な者の未来を…そして自由と平和を奪おうとしたお前達を…俺は決して許さん！」

猛は目の前の悪…シヨッカーと同じく人類の自由と平和を脅かしている『亡国機業』へと咆哮する。

そして、一夏と共に前に出ると、敵を見据える。

俺は、決して強くない。

だからこそ多くの人々を助けられず、悩み、苦しみ、そして仲間を求めて 10人もの地獄への道連れを作ってしまった。

だがそれでも俺はこの生き方を選んだ事を後悔などしていない。
するはずがない。

それで一文字や後輩達に生きる道を示せるのなら

それで一夏君や弾君、多くの人々の命を、
笑顔を、未来を 自由
と平和を守れるのであれば

そして今日の前にいる人類の自由と平和を奪つ悪と戦い、
打ち倒
せるのであれば

この忌まわしき仮面、喜んで被ろう。この呪わしき身体、喜んで
使おう。この血塗られた拳、喜んで奮おう、そしてこの魂、喜んで
燃やし尽くそう。

俺は

俺の名は

それが俺だ
俺達だ。

俺達は

仮面ライダー！！！！

そして猛は左腕を腰に当て右腕を左斜め上に突き出し、円を描くように右腕を右斜め上まで持っていく。和也と藤兵衛には見慣れた、一夏は一度見た、弾は初めて見る猛の体内のスイッチを入れる動作だ。

「ライダー…変身!!」

入れ替えるように右腕を腰に引き左腕を右斜め上に突き出すとベルトの風車が回り、本郷猛の肉体がバツタの姿を模した改造人間へと変わる。

同時に一夏もISの装甲を展開し、装着する。

そして猛と一夏は敵と対峙する。

「頑張れよ一夏！思い切りやってこい！」

「そうとも！今夜は仮面ライダーがついてるんだからな！」

「…違うぞ、滝」

猛が和也を嗜めるように続ける。

「…と…そうだったな、悪い悪い。」

「そうそう、『ダブルライダー』がついてるんだからな」

和也と藤兵衛が笑って顔を見合わせる。

「ダブル…ライダー…?」

「そうとも、一夏君」

思わず疑問を口に出す一夏に対して猛が答える。

「今夜は俺と君で」

「ダブルライダーだ!!」

そして仮面の騎士の魂を受け継いだ、白き守護騎士…『白式』を身に纏った織斑一夏と

仮面の下に涙を隠し、人類の自由と平和の為に戦う技の戦士…最初の仮面ライダー『仮面ライダー1号』の二人は今宵限りの『ダブルライダー』として自由と平和を奪う悪を打ち倒すべく戦闘を開始し

た。

戦闘が開始されると即座に仮面ライダー1号は手近な相手に突っ込み、アサルトライフルを呼び出す間すら与えぬ突き蹴りの猛攻を加える。

「こいつ…やはり『マスクドライバー』！」

女は必死にそれを防御しながらも相手の正体を悟り舌打ちする。

『マスクドライバー』…『亡国機業』の計画をISに優るとも劣らぬ力で叩き潰してきた11人の仮面の男達。現在『亡国機業』目下最大の脅威であり、悩みの種だ。少なくとも一筋縄で行くような相手ではない。

それを証明するかのように仮面ライダー1号は情け容赦のない連携でシールドを削っていき、巧みに敵を追い詰めていく。

「だが、所詮は飛べないただのバッタ！飛びさえすれば！」

「そう、上手くいくかな？」

仮面ライダー1号から距離を取ろうと上空へと飛び上がるISだが、飛んできた荷電粒子砲により撃墜される。

「何故だ…何故そんなエネルギーがあるんだ!？」

撃ち落としたのは織斑一夏が装着する『白式』の左腕『雪羅』の荷電粒子砲であった。確かにそれだけの威力はあるのだが、女達が見た限りでは『白式』にそんなエネルギーは残っていない筈だった。それが何故使えたのか。

しかし一夏には何となくその理由が分かるような気がした。

(きつと『白式』が…『白式』の意志が猛さんに…仮面ライダーに
応えてくれたんだ)

勿論根拠なんてない。ただの勘だ。だが、『白式』の意志に触れた事のある一夏にはそうとしか思えなかった。

「くっ!何でもいい!もう一回撃墜すればいいだけの話よ!」

そこに1機のISが一夏に狙いを定めアサルトライフルを放とうとする。

「させるか!ライダーパンチ!」

しかし飛び上がって落下の勢いを乗せた仮面ライダー1号の右ストリートをまともを受けて大きく姿勢を崩す。

更に姿勢が崩れた相手に拳や手刀、足刀を叩き込み、一気に攻め立てる。

「11の!」

「やらせるか!」

そこに他のISからの銃撃が加わりどうにかして仮面ライダー1号を引き剥がすと、リーダー格の女が告げる。

「ヤツが『マスクドライバー』なら…アレで行くわよ!」

するとISは一齐に『イケニッションブースト瞬時加速』を使い上空へと逃れる。

「逃がすか!一夏君!」

「はい!」

仮面ライダー1号は自慢の脚力を生かしてビルの壁を蹴りながら、一夏はスラスターを噴かして追撃する。

「これなら回避も儘ならないわね!」

そこにISがアサルトライフルや機銃などで弾幕を張り仮面ライダー1号と一夏を叩き落とそうとする。

「クッ!この!」

一夏は必死に躲そうとして上昇出来ずに止まる。

しかし仮面ライダー1号は逆に銃弾の雨へと構わずに突き進んでいく。そしてビルの頂上にまで達すると身体をスクリューのように高

速回転させて銃弾を弾きながら高々と飛び上がり、女達の上を取る。

「ライダースクリューキック！」

そのままスクリューのように高速回転して威力を増した飛び蹴りを1機に叩き込み、地面へと落とし、沈黙させる。

「だがそれが命取りだ！」

しかし飛び蹴りを放った直後の仮面ライダー1号に残るISは距離を取ると一斉射撃を浴びせる。

基本的に『マスクドライダー』は接近戦になればまず勝ち目はないが、遠距離への攻撃手段など無きに等しい。特に足場のない空中では自慢の脚力も機動力も意味を為さない。だからこうして空中で待機し、敵が一撃放って隙が出来た所に距離を取って集中砲火を加える。これが『マスクドライダー』との戦いで得られた戦訓を生かした『マスクドライダー』対策だ。『亡国機業』もただ黙ってやられている訳ではないのだ。

しかしまさか1機が落とされるとは、そして仮面ライダー1号の防御がここまで固いとは思わなかったらしく、攻めに焦りが見えてくる。

そして一気が勝負を決めようとパイルバンカーを呼び出し仮面ライダー1号へと突撃し、杭を突き出す。

「甘い！ライダー返し！」

その杭を仮面ライダー1号は半身で躲すと逆に腕を取り、一本背負いの要領でそのISを突撃の勢いも乗せ地面へと投げる。

「何の!」

しかしISはスラスターとPICを駆使してどうにかして地面に叩きつけられる直前で踏み止まる。

逆にリーダー格の女が何やら高機動型パッケージを呼び出しスラスターを噴かして仮面ライダー1号を背後から羽交い締めにする。

「武器が無くともISにはこんな芸当だって出来るのよ?」

そう言うと女は仮面ライダー1号を抱えたままスラスターを最大出力で噴かし、『瞬時加速』やPICを併用しながら高速で何回も旋回して飛び回りつつビルの壁などに仮面ライダー1号を何回も叩きつける。

「潰れなさい!!」

そしてスラスター出力を最大に引き上げ急上昇すると仮面ライダー1号を抱えて『瞬時加速』で一気に最高速度まで加速しながら降下し、自身はPICを駆使して地面ギリギリで急上昇しつつ仮面ライダー1号を渾身の力とスピードを乗せて地面がへこみ、大量の土煙が上がる勢いで投げ落す。

「猛さん!?!」

「それより自分の心配をしなよ!」

思わず意識がそちらに飛ぶ一夏に別のISがタックルをかまして地面に叩き落す。

「これで…終わりよ！」

更に女達は地面に落下した仮面ライダー1号と一夏の上空にまである程度降下するとミサイルや機銃など重火器が満載されたパッケージを呼び出し、二人に向ける。

「消し飛べ！！」

そして二人に対して機銃やミサイル、アサルトライフル、グレネードなど全火力を集中させて浴びせかける。

グレネードやミサイルの爆風に機銃が立てる砂煙もあり瞬く間に一夏の姿は煙の中に消えていくが、構わずに女達は派手に、執拗に、念入りに、それこそ塵一つ残さず消滅させん勢いでミサイルや銃弾、グレネードの雨を降らせる。

やがて女達のミサイルは尽き、グレネードは止み、機銃の弾が切れ、ていくと女達はパッケージを排除していき、最終的に全機が弾を撃ち尽くしパッケージを投棄していた。

女達の眼下には濃い煙が立ち込めており、地上の様子は見えない。

「フツ、他愛もない。所詮『マスクドライバー』と言っても男、究極の機動兵器たるISが本気を出せば勝てる訳がないのよ」

「今まではまぐれや不意討ちで勝ちを拾ってきたようなもの、これから10人も軽く捻ってやるわ」

「ISを倒せるのはISだけ…これが真理よ。もつとも、女が乗ったって条件がつくけどね…織斑一夏も所詮は劣等な男。女が駆るISには勝てる筈もないわ」

「しかしわざわざ『ヴォルケーノ』パッケージ使う必要があったのかねえ…『マスクドライダー』対策マニュアルに従ったはいいいけど織斑一夏まで肉片すら残らず消し飛んじまったんじゃない？」

「その辺りはマニュアルに従った結果の事故です、って報告してやればいいわ。むしろ今まで『マスクドライダー』を過大評価し過ぎていたのよ。ちゃんと対策を立てればISの前では敵じゃないわ」

そんな会話をめいめい交わしながら女達は地上の煙が晴れるのを待つ。『絶対防御』のある一夏はともかく仮面ライダー1号は確実にミンチより酷い状況になっているだろうが、死体の確認までが任務である。死体があれば、だが。

そう気楽に考えていた女達の眼下にある煙が徐々に晴れていく。最初はどんな惨状かと面白半分で見っていたがやがて驚愕に変わる。

「嘘…でしょ…？」

「何で…何で…」

「あり得ない！あり得ないわこんな事！」

「夢…じゃないわよね…？」

「夢だとしたら…悪夢よ…」

「これが…これが…」

やがて煙が完全に晴れると地上の様子が完全に分かるようになる。

「…どうした？それで終わりか？」

そこには、一夏の盾になるように立ちはだかる仮面ライダー1号がいた。

よく見ると仮面ライダー1号や一夏の周囲にだけ機銃の弾跡やミサイルやグレネードが破裂した形跡がない。恐らく仮面ライダー1号がことごとく直撃弾を弾き、反らしたのだろう。

「化け物め…！」

女達が誰からともなく驚愕と恐怖を込めて呟く。

「猛さん…大丈夫なんですか？」

「ああ。とはいえ最後の投げばかりは威力を殺し切れなかったけどね」

心配そうに尋ねる一夏に対して仮面ライダー1号は事もなげに答えてみせる。

いくら改造人間と言っても先程の羽交い締めからの叩きつけや投げを全てまともに食らっていたら暫くは立てなかったであろう。

しかし仮面ライダー1号は敵が勢いを付ける為に高速で何回も旋回

する事を…そしてその際に発生する風圧を利用した。

簡単に言えば旋回している間にベルトに風力をため込み、叩きつけられる瞬間に一気に風力を解放してベルトから噴射する事で威力を完全に相殺していた。しかもご丁寧にも何回も高速で旋回してくれたので、威力を相殺するには十分な風力には事欠かなかった。

流星に最後の一撃ばかりはベルトからの風圧だけでは完全に相殺し切れず少なからずダメージを受けたが。

そして一夏が落下し、敵が一斉射撃してくる直前に一夏の盾となりこちらに直撃してきそうなミサイルやグレネードを反らしたり機銃を弾いたり相殺したりして敵の攻撃をやり過ごした。

(とはいえ俺はともかく距離を置いて撃たれ続ければ一夏君のISのシールドエネルギーが保たないだろう…何としてもヤツらに俺達が近付ける隙を作らねば…)

そして仮面ライダー1号は思案をする。

連中はこのまま距離を取って遠巻きに撃ち続けてくるだろう。そうなれば一夏はジリ貧だ。シールドは決して無限ではないのだから。何より仮面ライダー1号とて撃たれ続ければ、いつかは限界を迎える。飛び道具が無い上空中での機動力で圧倒的に劣る仮面ライダー1号には不利な状況だ。

そして女達もそれを知ってか、再びスラスターを噴かして旋回しながら二人に銃撃を加えようと…

「そうは…！」

「させるかよ！」

した瞬間に2機のISの上から二台のバイクが落下してきてのしかかる形となる。

「おやつさん！滝！」

バイクに跨がっていたのはおやつさんこと立花藤兵衛と滝和也だった。恐らく近くの立体駐車場の屋上から勢いを付けてバイクで落下したのだろう。

「弾君！」

「はい！食らいやがれ！ライダー…キック！」

更に和也のバイクの後ろに乗った五反田弾が和也から借りたらしいスタンガンが仕込まれたブーツでバイクの下敷きとなったISを踏み付けるように足を蹴り出し、高圧電流を流し込む。

「今だ！猛！」

「派手にぶちかましてやれ本郷！」

「お前も負けんなよ一夏！」

あまりに異様な光景に呆然とする女達を尻目に、二台のバイクはそのまま地上へと降りて行く。

「おやつさん…滝…ありがとう」

「弾…ありがとうな」

二人はそれぞれ縁の深い者に感謝の言葉を述べると、並び立ち、顔を見合わせ頷き合う。

「行くぞ！」

「はい！」

「ライダージャンプ！！！」

そして仮面ライダー1号はその脚力を最大に生かして、一夏は『瞬時加速』を使って一気に上へと飛び上がる。

「そんな直線的な動きで！」

それを嘲るように2機のISがそれぞれ向かい合う形になった仮面ライダー1号と一夏の背後を取る。仮面ライダー1号にはスラスタはない。一夏も『瞬時加速』の直後で小回りは利かない。そう読んだのだろう。

「纏めて落ちろ！！！」

「そう」

「かな」

その瞬間仮面ライダー1号と一夏は互いの足を合わせると渾身の力を込めて互いを蹴り出し、高速でそれぞれの背後にいる2機へと突っ込んでいく。

そして啞然とする敵に一夏はその勢いのままに再び『瞬時加速』を使い手に持った『雪片式型』で思い切り斬撃を放つ。

「はあああああっ！」

そして敵はスピードが乗った斬撃を受けて一撃の下に撃墜される。

一方、仮面ライダー1号もまた一夏を蹴り出した反動を利用した飛び蹴りを自身の背後にいる敵へと放つ。

「ライダー反転キック！」

それで背後の敵を叩き落とし沈黙させるが、仮面ライダー1号の攻撃はまだ終わらない。

仮面ライダー1号はそのまま先にあつた壁を蹴ってまたも反転すると、呆然としながらも飛び立とうとするISへと反転キックを放つ。

「ライダー！」

まだ終わらない。それでそのISの『絶対防御』を発動させ沈黙させると同時に更に反転して別のISにその反動をプラスしたキックを放つ。

「稲妻！」

そのISも蹴りで沈黙させるがそのまま蹴りの反動を生かしてもう一度反転し更に1機へと稲妻のようなエネルギーを纏いながら、先の2回の蹴りと合わせて稲妻のようにジグザグな軌道を描くように反転キックを放つ。

「キック！」

それを受けてそのISも為す術なく悲鳴と共に『絶対防御』を発動させ地面へと墜落する。

「流石『ダブルライダー』だぜ！」

それを地上で眺めていた和也が称賛の声を上げる。藤兵衛と弾は当然とばかりにそれぞれ猛と一夏を誇らしげに見ている。

「和也さん！」

「お兄！」

そこに織斑千冬と五反田蘭が三人の下へ走り寄ってくる。

「遅かったじゃねえか、千冬」

「蘭！どうして此処が！？」

「各方面との調整に時間がかかりましてね…彼女はたまたまこちらに走っていたのを見かけたので拾ってきました」

「あれだけの騒ぎなら普通気付くよ…けどお兄…本当に心配したんだからね！」

「立花さん！ご無事ですか！？」

「よかった！お怪我はありませんか！？」

「滝捜査官は…その様子じゃ大丈夫そうですね」

「というか本当に退院してたんだ…やっぱり人間って意外と頑丈なんだ…」

「流石は教官の戦友だ。私も見習わなければな」

「…見習う以前の問題だと思っけど…」

「というか何で弾がいるのよ？」

「そう言わないの…私の周りでは心配で心配で堪らなかった人もいるんだから」

「篝ちゃん！真耶ちゃんもか！」

「ご心配どうもセシリア嬢。それにシャルロットとラウラ…あと簪さんだっけ？…もわざわざお疲れ様」

「俺だけ扱いが酷くねえか、鈴。それとありがとございます、楯無さん」

そして会話をめいめい躲している所にISが9機降りてくる。教員の山田真耶の機体を除けば全て専用機：しかも全員織斑一夏に好意を寄せている少女…和也曰く『イチカー軍団』が装着しているものだ。先に民間人である弾や藤兵衛を保護しにきたのだろう。

その『イチカー軍団』の視線の先では一夏が『雪片式型』を振るい最後の1機と戦っていたが、

「この！しつこい！」

咄嗟に女がパッケージを呼び出し自爆させた爆風をもろに受けて一夏は墜落していく。

「……………一夏（さん）、君（！）？」「……………」

慌てて飛び出して行くこととする8機を当の一夏が遮る。

「俺は…大丈夫だ…それより…あいつを…！」

「しかし！」

「大丈夫だ！」

言い募ろうとする篠ノ之箒を和也が遮る。

「一夏君は、君や千冬や蘭ちゃんが思っているより、ずっと強い。だから、大丈夫だ」

「で、でも！」

「一夏君！『電光ライダーキック』だ！」

更に言い募ろうとする少女達を遮るように藤兵衛が一夏に叫ぶ。

「立花さん！？」

「箒ちゃん、一夏君を…信じてやってくれないか？俺は一夏君を…一夏君なら必ず出来ると…信じている…！」

「それによ」

更に和也が続ける。

「今一夏君には…あいつが付いてるんだ」

そう言って和也は逃げるISを追い、呼び出した『サイクロン号』

に跨がりビルの壁をジャンプ台代わりにして高々と宙に舞う仮面ライダー1号を見やる。

「一夏君や弾君、俺達や千冬に君たちが信じて、支えて、助けて、応援してくれるならどんな悪党だってぶっ倒して…そして2341発のミサイルからでも…467機のISからでも…一夏君を…一夏君にとって大切な君たちも、何もかも守り抜いてみせる仮面ライダーが付いてるんだ…一夏君が仮面ライダーを…仮面ライダーが一夏君を信じてるみたいに…君たちも一夏君を、そして仮面ライダーを信じちゃくれねえか？」

それを聞くと皆黙り込む。仮面ライダーの名を出されては黙るしか…信じるしかない。

それに応えるように仮面ライダー1号は逃げようとするISに向かって『サイクロン号』で体当たりを仕掛ける。

「サイクロン…アタック！」

その一撃でISのメインスラスタが破壊され推力を失ったと見るや仮面ライダー1号はサイクロン号からジャンプし、落下の勢いを増しながらISを掴み地面へ…一夏に向けて落下し始める。

「行くぞ！一夏君！！」

「はい！猛さん！！」

一夏は落下しながらも『雪片式型』を地面に思い切り投げつけ、垂

直に突き刺す。そしてスラスターとPICを駆使して体勢を整え、『雪片式型』の柄の上に足を乗せると同時にパワーアシスト機能を全開にし、『瞬時加速』を使い真上へと勢いよく飛び上がる。

「行っけえええええ！一夏あああああ！」

弾の魂の叫びに応えるように、一夏はそのまま上昇しながら逆立ちのような姿勢でスラスターを噴かしつつ蹴りの体勢に入る。

仮面ライダー1号はそれを見るとISの腕を取り、『ライダー返し』の要領で一夏の方に放り投げると同時に踏みつけるような形でISに蹴りを放つ体勢に入る。

そしてISを装着した女は悟る…自分は間もなく一夏が下から放つ蹴りと仮面ライダー1号が上から放つ蹴りとのサンドイッチになると。そしてスラスターが破壊された自分に逃げる手段が無い事を。チエックメイト、だ。

だがそれでも…いや、だからこそ女は仮面ライダー1号に向かって叫ばずにはいられなかった。

「貴方達は…貴方は一体何なのよ!？」

「俺の名は」

「俺は」

「俺達は」

「仮面ライダー!!!」

「電光おおおライダーアアア!」

「ライダーアアアハンマアアア!」

「キイイイイイイック!!」

『白式』を身に纏った織斑一夏が放った電光の如き渾身の蹴りと、仮面ライダー1号が放った正義の鉄槌に相応しい必殺の蹴撃は同時に悪へと炸裂し、見事その企みを打ち砕いた。

滝和也、立花藤兵衛、そして変身を解いた本郷猛は並んで立っていた。

「お兄のバカ！人に散々心配かけさせて！」

「痛い痛い！止めてくれ！」

そして心配と安堵のあまり半泣きになりながら兄の五反田弾を殴っている五反田蘭を止めに入る。

「蘭ちゃん、そこまでにしてやってくれないか？」

「ああ、誘拐されたばっかなのに俺達の無茶にまで付き合わせちまったからな」

そう藤兵衛と和也は蘭に言うと渋々弾を解放する。そこに猛が弾に言う。

「ありがとう、弾君。君があの時見せてくれた勇気が一夏君に、俺に力をくれた…流石、風見志郎が見込んだだけの事はある」

「風見さんを知ってるんですか!？」

五反田兄妹が声を揃える。

「ああ、大学やオートレーサーとしての後輩で…血を分けた兄弟みたいなものでもあるからね」

猛は笑って続ける。

風見志郎を改造したのは他でもない猛とその盟友一文字隼人だ。その際に自身の機能を参考にしているので猛の表現も間違いではない。「そうだったんですか…後本郷さん、そろそろ一夏も助けてやってくれませんか？流石に可哀想になってきたというか…」

そして弾は現在織斑千冬と『イチカー軍団』に『制裁』されている織斑一夏を見やる。

最初は千冬がIS学園教師として勝手な行動をした一夏を鉄拳制裁している…と思いきや、静観の構えを取っていた三人だが、やがて『イチカ軍団』がそれに加わり千冬もそれを止めなかつた事からその認識を改めていた。

現在一夏は和也曰く『会長フランク』こと更識楯無に言葉責めされている。

やがて千冬がもう一発殴ろうかとした所で猛が声をかける。

「そこまでにしてもらえませんか？彼がそのような行動を取ったのには俺にも責任がありますから」

「貴方は…」

「…こうしてお会いするのは初めてでしたね。改めて…本郷猛です。貴女の事は一夏君や滝、それと沖一也から聞いていました。お会い出来て光栄です、織斑千冬さん」

「いえ、私も一夏や和也さんから話を聞いてましたから…ありがとうございます。二度も弟を…一夏を助けて頂いて」

そして千冬は猛に頭を下げて礼を述べる。

「頭を上げて下さい、千冬さん…むしろ俺の方こそまた一夏君に助けられたんですから」

猛は笑って首を振ると続けて一夏に向き直る。

「ありがとう、一夏君。また、君に助けられたよ」

「でも…俺…みんなに迷惑かけて…」

しかし一夏は落ち込んで答える。今回一夏は制裁を甘んじて受けている。自身の無思慮さを恥じているのだろう。

「…それはこれから直して行けばいいさ。もし君がどうすればいいかわからないなら…俺で良かったら君の力になるよ」

「猛さん…」

「それより一夏君、歩けるかい？戦いのダメージもあるだろうし、彼女達の愛の鞭は少々過激だったからね」

「いえ、大丈夫…のわ!？」

歩き出そうとして倒れかける一夏を猛が支える。どうやら予想以上にダメージは大きいようだ。そのまま猛は一夏に肩を貸す。

「本郷、そっぴやお前の用件って何なんだ？来るって連絡はあったけど相当の事なんだろ？」

和也はそのまま猛に尋ねる。和也の下に猛が日本に帰国する事と話があるという事は事前に連絡が入っていたが、話の内容はまだ聞いていない。

猛は表情を引き締める。

「…『亡国機業』が大規模な作戦を日本で展開するらしいとの情報が風見と結城から入った。二人は既にこちらに向かっているそうだ

が後は色々あつて少し遅れるらしい。だから…」

「…俺に迎えに行けつてんだろ？」

「…ああ。また、世話をかける」

「気にすんな、本郷。お前の連絡はいつも入れてくるクセに割と大事な頼みは唐突なのは昔からだしな」

「すまん…」

「その代わりと言つちやなんだが暫く一夏君の傍にいてやってくれないか？いくらおやつさんや弾君、蘭ちゃんが居ても肝心の学園に千冬や『イチカー軍団』がいないんじゃないか？一夏君も寂しいだろうし…何よりお前も一夏君に教えた事は沢山あるだろうしな」

そう言つて和也は笑つて答えてみせる。

「私達が一夏の傍から…ですか？」

「ああ。だってよ、お前沖一也の事迎えに行けつて言われたら断れるか？」

「それは…確かにそうですけど…」

「俺からもお願いします、千冬さん。それと他の方も…話は一文字や後輩達から聞いています。ですので…」

「一文字隼人を、神敬介を、アマゾン、城茂を、筑波洋を、沖一也を、村雨良を、南光太郎を…かつて貴女達と出会った『仮面ライダー』を、迎えに行つてはくれませんか？」

「…そう言われたら、引き受けるしかありませんね」

篠ノ之箒が…かつて城茂に助けられた少女が猛に応える。

「ええ、むしろ頼まれなくともそうする気でしたわ」

セシリア・オルコットが…神敬介を父親代わりと敬愛する少女が続ける。

「『トモダチ』の為ならそれくらい、朝飯前ですし」

鳳鈴音が…アマゾンと今も変わらぬ友情を育んだ少女が笑う。

「僕も洋兄さん…仲間と、また会いたいと思つていましたから」

シャルロット・デュノアが…筑波洋を仲間と信じ、兄とも慕う少女が爽やかに言う。

「私達の為に血を流してくれた人…カメラード『戦友』カメラードを迎えに行かない程、私も恥知らずではありません」

ラウラ・ボーデヴィツヒが：人間・村雨良と秘密を共有し、その生き様と魂を伝えられた少女が頷く。

「私も簪ちゃんも光太郎さんには…」

「…奇跡を起こしてくれたあの人には…改めてお礼がしたいですから…」

更識楯無と更識簪が：南光太郎にその命や絆を助けられ、守られた姉妹がそれぞれ肯定する。

「私も、一文字さんと会って…最高の一枚を見せて貰いたいですし」

山田真耶が：一文字隼人と出会い、命懸けで救われ、そして変わった少女が微笑む。

「私も助けられた恩返しも…何より『ホワイトナイト』に託した伝言が無事伝わったと沖一也さんに…スーパー1に教えたいですから」

「もつとも、それがなくともどの道こつちのいい加減な方の『カズヤ』さんに付き合わされてたでしょうけどね」

織斑千冬が：少女時代に沖一也に二度も助けられ、今は滝和也と互いに助け合う…二人の『カズヤ』を知る女性が笑って滝和也を見やる。

「…一夏を、お願いします」

「…はい」

改めて一礼し一夏を託す千冬に猛は簡潔に…しかし力強く頷いてみせる。

「それじゃ、行こうか…猛、一夏君、弾君、蘭ちゃん。夜風は冷たかっただろうしコーヒーでもご馳走するよ」

「ありがとうございます、おやっさん…久しぶりだな、おやっさんのコーヒーを飲めるのも」

「本郷さん…滝さんから聞いたんですけど藤兵衛さんのコーヒーってそんなに美味しいんですか？」

「ああ、おやっさんは昔喫茶店のマスターもしてたからね。味の方は俺や風見が保証するよ…それと弾君、君は俺の反対側から一夏君に肩を貸してやってくれないか？」

「分かりました。…しかしお前やつぱ凄いな…最高に格好良かったぜ、あの『電光ライダーキック』はよ」

「よせよ、むず痒いって言うか…それにお前だつてあの時の『ライダーキック』、猛さんや和也さんみたいだったし」

「お兄…そんな事までしてたの!？」

「俺達に付き合う形だね…悪いね、蘭ちゃん。ここは俺に免じて許してくれないか？」

「それにおやっさんや滝、弾君の…そして一夏君のあの姿があったから俺も心を奮い立たせる事が出来たんだ…俺からも、頼むよ」

「…二人からそう言われたら、私は何も言えませんよ」

「ありがとう、蘭さん…けど二人共…特に弾君はこれからあまりあんな無茶はしないでくれないか？ライダーキックは仮面ライダーだから出来る技だ…一夏君もそのせいで足を痛めたみたいだしね」

「面目ないです、猛さん…」

「何、無茶言った俺が悪いのさ。それに言ってくれば俺がライダーキック使えるまで特訓に付き合うさ」

「お兄、藤兵衛さんに特訓して貰ったら？本郷さんや風見さん、滝さんみたいになれるかもよ？」

「…遠慮しとく。何か鉄球とか使いそうだし」

「流石に猛達ならともかく君たちにはそんなもの持ち出さないって」

「…って本郷さん達には使ってるんですか！？」

「まあその話は追々しようか。その話も、俺が今まで何をしてきたのか…仮面ライダーとしてどうしてきたかも、弾君にも蘭さんにも…一夏君にも話すよ。そして教えるよ、仮面ライダーという生き方について…俺が昔10人の男にそうしたように、ね」

「…ありがとうございます、猛さん…俺も猛さんと…仮面ライダーとせめて魂だけでも同じになれるように…頑張りますから」

そんな話をしながら織斑一夏、五反田弾、五反田蘭、立花藤兵衛、

そして本郷猛は肩を並べて歩き去った。

それを姿が見えなくなるまで見送ると、和也は声を上げる。

「そんな弾君や本郷が羨ましい、なんて顔すんなよ…恋と友情は別腹さ。じゃ、俺達も行こうぜ？あいつらに…仮面ライダーに会いにな」

そう『イチカー軍団』に言うと篠ノ之箒、セシリア・オルコット、鳳鈴音、シャルロット・デュノア、ラウラ・ボーデヴィツヒ、更識楯無、更識簀、山田真耶、織斑千冬、そして滝和也も歩き出すのだった。

悪が人々を苦しめる時嵐と共に 嵐のように現れて、悪を倒すと嵐と共に 嵐のように去っていく仮面の男。彼の 彼らの名は

仮面ライダー。

第一話 俺の名は（マイ・ネーム・イズ）（後書き）

拙作をお読み頂きありがとうございます。

この話を読めばお分かりになる通り本作品には

- ・ 仮面ライダーとは改造手術や力の有無ではなく生き方
 - ・ 仮面ライダーはヒーローである
 - ・ 心や魂を宿す者は皆ヒーローになれる
 - ・ 己の正義を貫くヒーローは不死身
 - ・ 信頼されたり、声援を受けたヒーローは最強
 - ・ 命や魂を燃やしたヒーローはチート
 - ・ ヒーロー、ヒロイン、天才は老けない
 - ・ 男女は性別、漢は生き様
 - ・ 男女間の友情は成立する
 - ・ 最後に勝負を決めるのは魂の強さ
- などの勝手な思想や、
- ・ 困った時の石ノ森作品繋がりネタ

- ・困った時の役者ネタ
- ・困った時の他作品ネタ
- ・困った時のインターポール & 国際IS委員会
- ・困った時の『亡国機業』（ゴルゴムの意味で）
- ・困った時の織斑千冬 & 滝和也（狂言回し的な意味で）
- ・恋愛要素はお茶を濁す程度
- ・学園要素はあまり無し
- ・キャラ崩壊
- ・中途半端な群像劇的要素
- ・そもそも既に双方の原作を殺害している

等の悪癖がふんだんに盛り込まれております。極力改善していただけるように努力は致しますが、根本的にはこのようなスタンスで書いていくつもりですのでご容赦願います。

では本話を最後までお読み頂きありがとうございました。

宜しければ次話もお付き合い願います。

第二話 二度目の再会（セカンド・リユニオン）（前書き）

この話は同じ題材の短編、特に同じく篠ノ之箒と城茂を主役にした『少女は雷光を見たか』の内容を踏まえておりますので、事前にお読み頂けますとより理解し易くなると思われまます。

第二話 二度目の再会（セカンド・リユニオン）

一台のバイクが山道を走る。運転しているのはジャケット姿の男、その後には長い黒髪を後ろで一つに纏めた髪型：所謂ポニーテールにした少女が乗っている。どちらも日本人であるようだ。

そのバイクに乗った二人の目的地はこの先にある『庄野山』だ。

バイクを運転している男に少女が声を掛ける。

「わざわざこちらの用事の為に寄り道して頂いて申し訳ありません、
滝捜査官」

「気にしなくていいさ、箒。どうせ城茂も『庄野山』に来てるんだ
…そのついでにちょっとくらい寄り道したって変わらねえしな」

少女：箒ノ之箒に対して男：滝和也は事も無げに答えてみせる。

箒は世界唯一のIS操縦者育成機関『IS学園』の1年生、それに対して和也はFBIから出向のインターポール捜査官である。そんな一見すると妙な取り合わせの二人は、先日和也の戦友の一人である本郷猛の頼みを受けて今は『庄野山』にいるという城茂を迎えに行く為に、こうして行動を共にしている。

十日程前に箒はISの開発者でありISコアの製造方法を唯一知る
…それだけではなく『白騎士事件』以来色々と世界中を引つ掻き回している疑いがあるが…姉の束に対する人質として『亡国機業』ファントム・タスクに拉致されかけたが、その際に箒を保護したのが『おやっさん』こと立花藤兵衛と城茂である。

茂はどうか『亡国機業』を撃退し、箒がIS学園から駆け付けた幼なじみで想い人の織斑一夏と合流した後に一夏に茂と藤兵衛を紹介しようとした時には既に姿を消していた。

それ以前にも箒が中学三年生の頃剣道の全国大会に優勝したその日に、土砂降りの雨と雷が降り注ぐ中箒と茂は遭遇している…少なくとも箒の方は茂が『変身』を解除し立ち去っていく所までははっきりと覚えている…のだが、いかんせん事情が事情なのでそれを知っているのは当の本人達以外では話を聞いた藤兵衛くらいしかない。猛や和也の話では海外に渡り『亡国機業』の計画を阻止していたらしいのだが、先日日本で大規模な動きがあると聞くと日本に帰国したらしい。ただ茂は『庄野山』に何か用事があるらしく、その為に箒と和也が迎えに行く事になった。

同時に箒もそのついでとして個人的な用事も済ませるつもりだ。どの道茂が『庄野山』のどの辺りにいるかは連絡がないのでこちらから探さなければわからない状況なので当座の目的地があれば和也も気が楽だと言っていた。

「けどよ、茂はともかく箒は一体何の用があつて『庄野山』に行くんだ？」

「あの山には『篠ノ之神社』の分社があるんです。そこに奉納されている『紅暁^{あかつき}』を『篠ノ之神社』に納める必要がありますから」

和也の質問に対して箒が答える。

箒の実家は『篠ノ之神社』という神社である。現在では土地神伝承

の影響が強く出ている為分かり難いが、元々は『鹿島神宮』の祭神たけみかすちのかみ『武甕槌神』と並ぶ武芸の神として知られる『経津主神』ふつぬしのかみを祭る『香取神宮』の分社の一つであったと筈は父から聞いている。

その為元来は篠ノ之神社は『香取神社』の一つ、しかもかなり古くからあつた分社だつたらしいのだが、鎌倉時代になると宮司の家系が一度断絶し、土地の豪族で宮司の家と姻戚関係にあつた篠ノ之氏から養子という形で宮司を出してからは神社がある地の土地神信仰の影響が強まっていき、室町時代頃になると姓を篠ノ之に戻し、神社の名前も篠ノ之神社へと変えた。ただその後も元々の本社であつた香取神宮との交流はつい最近まで続いていたそうだ。

篠ノ之神社に伝えられる『劍の巫女』による神楽舞も本社である香取神宮やその近くに立地し、香取神宮とも関わりがある鹿島神宮の神職に伝えられていた『香取の劍・鹿島の劍』と言われる古流剣術と、元々現地で伝えられていた巫女による神楽舞とが合わさつて出来た物であるらしい。

「その『紅暁』ってのは一体何なんだ？」

「篠ノ之神社の本社：つまり私の実家に奉納されている『緋宵』の兄弟刀で『篠ノ之流』の開祖：私の先祖でもある『篠ノ之柳心』が愛用していたとされている刀です」

続けて筈は和也の質問に答える。

香取神宮の流れを組む篠ノ之神社には香取神宮から伝えられた古流剣術を筆頭に槍や薙刀、組打、弓、手裏剣など様々な古武術が宮司の家により伝承されており、篠ノ之神社に名前が変わってもそれは受け継がれていた。

室町時代中期頃、篠ノ之家の跡取り息子であった『篠ノ之柳心』：柳心は号で諱は俊直だが…は生来剣術を中心に武芸に長け、若い頃に香取の地へと赴き当時道場を開き身分を問わず指導していた『天真正伝香取神道流』の開祖である飯篠長威齊家直に教えを請い『天真正伝香取神道流』を学ぶと、やがて武者修行の為に各地を巡る旅に出た。

そして柳心は篠ノ之家伝来の古武術の剣技に学んだ『天真正伝香取神道流』、更に篠ノ之神社に伝えられていた『剣の巫女』の神楽舞をヒントに創意工夫をこらした独自の剣術流派『篠ノ之流』を創出し、篠ノ之神社に戻り父の後を継ぎ宮司となると同時に篠ノ之神社の境内に道場を設けて心身鍛練の術として身分を問わず『篠ノ之流』を広く伝授した。

その『篠ノ之流』を開く際に柳心は剣術の開祖の例に漏れず山籠りを行い、厳しい修行の末に遂に悟りを開き、『篠ノ之流』の極意に開眼した地であるとされているのが現在二人が向かっている『庄野山』である。

それ以来『庄野山』には篠ノ之柳心が勧請した篠ノ之神社の分社…と言っても普段は無人の小さなものだが…が立てられており、柳心が愛用した二振りの刀…『緋宵』と『紅暁』が奉納された。

後に二本の刀の内『緋宵』の方は、江戸時代に入り当時の宮司を務めていた篠ノ之柳心により『庄野山』の分社から本社である篠ノ之神社に改めて奉納し直され、その代わりに中国から来日し柳心と親交を持った『嵩山少林寺』の禅僧で、後に『少林拳赤心派』…日本には後に『樹海大師』により『赤心少林拳』の名で伝えられるが…の開祖となる『赤心道玄』より送られた直筆の書画が奉納されてい

る。

今回篇が『庄野山』に赴くのは現在ISの開発者である姉のせいで一家離散状態となり、日本政府の重要証人保護プログラムにより各地を転々とさせられている宮司で篇の父である篠ノ之柳韻に代わって篠ノ之神社の管理をしている叔母の雪子に、老朽化が激しく建て替える必要がある『庄野山』にある分社から由緒ある宝物である『紅暁』と赤心道玄の書画を持つてくるように頼まれた為、という理由も含まれている。その為茂が『庄野山』にいと聞いた篇はついでにそちらの用事も済ませる事にした。

ちなみに『緋宵』が「女のための刀」と言われ、女性用の実用刀とまで言われるくらい軽量で扱い易いのは対照的に『紅暁』は重く見た目も武骨で頑丈、肉厚といかにも男性的な刀となっている。

「しかし城さんはどうしてここに…？」

「さあな、俺にもよく分からん…そろそろ到着だ。この先はバイクじゃ行けねえみたいだし多分歩きになるから準備しといてくれ」

逆に質問してくる篇にそう答えながらも目的地が見えるや和也はそう告げてバイクのスロットルを入れ直した。

『庄野山』の麓にある溪流の河原に、一人の男が佇んでいた。

ジャケットの中に『S』の字が描かれたシャツを着ており、その両手には黒い手袋が嵌められている。

男はやがて動き出し、溪流を遡る形で河原をゆっくりと歩き始める。

「ここはあの時と変わらないままだな。山籠りした時と…また喧嘩した時と…なあ、五郎…ユリ子…」

男…城茂は周囲を見渡しながら誰に言うともなく呟く。

茂にとつてこの『庄野山』は何かと思い出深い地だ。城南大学に通っていた頃の同期でアメリカンフットボール部時代の親友であった沼田五郎と共に、『もっと強く（ストロンガー）』を合言葉に1年の時から4年の時まで毎年欠かさず夏になると二人揃って大学から程近い場所にあるこの山で山籠りと称して色々と馬鹿をやっていた。

熊に襲われかけて必死に逃げた事もある。うっかり飯ごうで炊いた米を全部この河原でぶちまけてしまい一食抜きとなり途方に暮れた事もある。この山の中腹にある神社らしき建物で寝ようとしたら関係者らしき男に泥棒か何かと勘違いされて竹刀でぶつ叩かれた事もある。

二人して喧嘩して、馬鹿やって、笑い合つて…あの時の茂と五郎からすれば当たり前で、今の茂と大地に眠った五郎にはもう二度とそんな機会はない…そんな時間を一緒に過ごしてきた場所だ。

そしてかつて共に悪の組織『ブラックサタン』に改造され、一緒に

アジトから脱出して、協力してブラックサタンと戦って、奇械人をぶっ倒して、手柄を巡って喧嘩して、意地を張り合って…そして心から愛していた岬ユリ子に何故『仮面ライダー』を名乗らないのかを一度だけ本人に直接聞いた場所でもある。

「未練、か…ヘッ、お前も人の事言えた立場じゃねえぜ…城茂。こうして今も未練タラタラじゃねえか…」

ふと茂は自嘲するように呟く。

あの時はユリ子の答えの意味がイマイチ理解出来なかった茂だが、ユリ子が自分を助ける為に命を落とした後になって漸くその意味が理解出来た。

『仮面ライダー』とは命有る限り戦い続ける者の名前だ。そして最後の最後まで『仮面ライダー』として生き続けていく事を宿命付けられる生き方だ。或いは最期を迎えた後も背負い続けるものなのかも知れない。

茂やその先輩、後輩達にはその名を名乗る事への躊躇いも、そんな生き方を選んだ事への後悔など無かったし、今もない。恐らくこれからもないであろう。

この忌々しい改造人間の肉体を使って五郎を殺し、多くの人々を苦しめるブラックサタンの野望を阻止出来るのなら悔いも、躊躇いも無かった。

だがユリ子は違った。孤児だった茂と違ってユリ子には一緒にブラックサタンに拉致されて、そして殺された兄の守がいた。だから兄を殺したブラックサタンとの戦いにも躊躇いも後悔も無かった筈だ。

でなければ喧嘩しながらも『電波人間タックル』として茂と一緒に戦い続ける事も無かったであろう。

だが未練は…『仮面ライダー』の名を名乗り、生き続ける事で『岬ユリ子』という一人の女として、岬守の妹としての名や生き方を捨ててしまうのではないか、という事に対する未練は少しだけあったのだろう。故にユリ子は生前『仮面ライダー』を名乗る事は一度も無かった。

だから茂も仮面ライダーの名を送るか先輩達から一度聞かれた時は反対した。ユリ子の意志を尊重したかったし、何より茂もユリ子にはただの女に戻って、平和な世界を見て、生きていて欲しかった。それが出来なかったのならせめて死んだ後だけは一人の女として…静かに、安らかに眠って欲しかった。だから、身勝手かも知れないが戦い続ける『仮面ライダー』の名前だけはどうしても送りたくなかった。

事情を聞いた先輩達は茂の意見に賛成した。或いは先輩達も、そして茂にもただの人間だった頃への未練が残っているのかも知れない。少なくとも茂には未練はあった。だからこそこうしてこの『庄野山』に来ている。

茂は久しぶりに『おやっさん』こと立花藤兵衛に会いに行った際に『亡国機業』に狙われていた篠ノ之箒を助けている。もっとも、それより前に一度ISに追跡されていた彼女を助けているので都合茂は二度箒を助けている事になる。

箒の前から姿を消した後はオーストラリアに渡り『亡国機業』の計画を追っていたが、先輩の風見志郎と結城丈二より連絡を受けて日本で行われるという大規模計画阻止の為に日本に帰国した。

そのついでにこちらに立ち寄ったのだが、色々と思う所が有り過ぎて自分でも予想外に長居し過ぎた為に本郷猛に頼まれた先輩に当たる滝和也と篤とが自身を迎えに来る事になった。その際寄り道するかもしれないと和也は言っていたがどの道この山に居る事は変わらないので茂としても特に異存は無かった。

「さて、と…いつまでもこんな事してたらわざわざ迎えに来てくれた滝さんと篠ノ之さんに申し訳が立たないな…行くか、寄り道するとしたら神社くらいしか場所は思い当たらないしな」

そう呟くと茂はこの山の中腹にある神社を目指し歩き始めた。

『庄野山』にある篠ノ之神社の分社。いかにも古そうなこの社殿の前に一人の少女が居た。

少女は艶やかな長い黒髪を一つに纏めた髪型：いわゆるポニーテールにしている。その手には抜き身の日本刀が握られている。しかもかなりの業物のようだ。

先程から少女は舞うように刀を虚空へと振るっている。時に静かに風の如く、時に激しく嵐の如く、その剣を振り、構える。

『篠ノ之流』の演武の型：その中でも主に神前で神に捧げる為に行われる型だ。

基本的に『剣の巫女』による神楽舞を基にしているだけあり基本的な所作には似通った部分はあるが、たおやかな神楽舞とは違いやはり雄々しく、勇壮な所作が多く、見た感じの印象はだいぶ異なる。

しかし少女の所作はそうした雄々しさや勇壮さはあまり感じられない。むしろ凛として鋭く、それでいて清楚な：美しさすら感じられる程だ。

その長い黒髪は剣を振るたびに艶めかしくたなびき、紅く瑞々しい唇からは時折鋭い呼吸や吸気が漏れてくる。その無駄なく引き締まった肢体は型を行う度に伸びやかに、しなやかに動く。

やがて演武を終えたのか少女は残心を決め、納刀し、社殿に一礼する。余程集中していたのか頬はほんのりと紅く染まり、額には珠のような汗がある。息も若干上がっているのか女性らしく丸みを帯びた肩と、年齢の割には大きめの膨らみが目立つ胸も呼吸に合わせて上下している。

そこに少女に向かって拍手をしながらジャケットを着た男が歩み寄る。演武の間は鳥居にもたれかかっていた見ていたようだ。

男の立ち姿は一見すると隙だらけでだらしなく、雰囲気からしている加減さと不真面目さをこれでもかとはかりに醸し出している。ここまでくると少女とは別の意味で美しいというか潔い。

しかしそれが単なるポーズに過ぎない事は男をある程度知る者の中

では周知の事実だ。同時にそのいい加減さや不真面目さは元来のものだとも知られているが。

しかしそんな事は特に気にしていない男は構わずに少女に声をかける。

「いや、まさに眼福というかお見事って感じだったぜ？ 箒」

「いえ、こちらこそお見苦しい所をお見せして申し訳ありません、滝捜査官」

「見苦しいどころか一瞬素で見とれるかと思っただぜ…これで目的の物は持つて行って大丈夫なんだよな？」

「はい。奉納の演武は終わりましたから」

ジャケット姿の男：滝和也と話しながら演武を終えた少女：篠ノ之箒は和也と共に社殿の扉を開ける。

篠ノ之神社のしきたりとして奉納された器物を持ち出す際には代わりとして演武を神に捧げる事で神を宥める、という事が必要な為箒は神へと奉納する『篠ノ之流』の演武の型を執り行い、和也は邪魔にならないようにそれを見物していた。

そうやって演武を終えた後は目的の奉納され社殿内に保管されている『紅暁』と『赤心道玄』直筆の書画類を運び出す。

社殿には鍵がかかっているが箒が神社の管理を任されている叔母からちゃんと社殿と保管している長持の錠前の鍵を借りてきてあるので問題はない。

箒が社殿の鍵を開け中に入り奥へと向かうとそのまま長持の前に立ち、鍵を使い長持を開け、中から一振りの刀と掛け軸が中に入っているらしき木製の箱や巻き物を取り出し、風呂敷に包んで持つ。

そして社殿の外で待つている和也に一声かけると二人は並んで境内を出て石段を降り、森に囲まれた山道を歩いていく。和也のバイクで行くには少々狭すぎるのでバイクは現在ここからやや離れた麓に止めてあり、歩きで神社までやってきていた。

「しかし、さっきの演武見てて思い出したんだが…君の使ってる『篠ノ之流』なんだが、千冬の動きと結構似てないか？」

「織斑先生も昔は『篠ノ之道場』に通ってましたから…」

「つまり箒と千冬は同門って訳か…なら納得だぜ、色々な意味で」そして今箒と和也は箒の幼なじみで想い人である織斑一夏の姉で自身が一夏の担任教師である織斑千冬について話している。

千冬とは実家の篠ノ之道場だけではなく最近通い始めたIS学園近くにある武道場『大野練武館』でも同門に当たる。

それに姉の束とは古い付き合いという事もあり千冬とは一時断絶があったとはいえそれなりに長い付き合いだ。

同時に千冬はかなりのブラコン…箒は知らないがとあるカメラマンをして「弟独占を企む姉の組織『おとう党』大幹部にして日本支部長、その正体はブラコン怪人『ブリュンヒルデ』」と言わしめる程度…であり、箒やその恋敵達にとっては一夏本人にシスコンの気が

ある事もあつて目下共通した最大の強敵でもある。

箒はその千冬と現在自身が一緒に居る和也とは第2回モンド・グロツソ以来の仲と千冬や和也、それに一夏から聞いており、決勝戦で起きた誘拐事件の際には千冬と協力して一夏の救出に当たつたらしい。

一見すると厳格で根は真面目な千冬といい加減で不真面目な和也は対照的だ。実際千冬は和也と出会ってから和也に対するツッコミを何回入れたか分からないらしい。というより箒も二人がIS学園での食堂で喧嘩もとい漫才を繰り広げていた姿を目にしている。

学園内ではあくまでIS学園の教師として振る舞い、弟の一夏にも『織斑先生』と呼ばせ厳しく接するくらいには公私の区別を付ける千冬を巻き込んで、だ。和也は間違いなく大物だ…一夏にはああなつて欲しくないが。

というより千冬の懸念通り既に一夏に何かしらの悪影響を与えている気がする。少なくとも恋のライバル達と見舞いの名目で一夏に会いに行った時に、ドアの前に居たとき丁度エ…いかがわしい本を隠し持っていないか聞いているのが聞こえていた上、入る瞬間には好みのタイプを聞いていたような男だ。一夏に何を吹き込んでいるか分かつたものではない。

ちなみに胸が大きいのが好みと言えば鈴やラウラや簪、シャルロットが、小さいのが好みと言えば箒やセシリア、シャルロットが、程よいのが好みと言えばシャルロット以外が一夏を『制裁』するつもりだったので、直後に緑川ルリ子が乱入して命拾いした結果となつた。その翌日は散々な目にあつたが。

そんな和也だが、千冬との仲は決して悪くはない。というより千冬がわざわざIS学園まで呼び寄せ、和也も千冬の頼みを快諾するくらいには互いに信頼し合っている。

その理由が最初は分からなかったが、和也がIS学園までやって来た翌日に無人ISがまたも襲撃してきた際にその理由が何となく分かった。

連携を寸断された事や動揺が重なって実力を発揮出来なかった事も重なっていたとはいえ自分達専用機持ちすら苦戦させる『仮面ライダー』を模した無人ISに対しても和也は生身で敢然と挑みかけた。

当然生身でISに勝ち目などあるはずもなく、ボロボロになりながらも和也は立ち上がり戦い続けた。篝達を…かつて仮面ライダーが命を懸けて守り抜いた篝達を仮面ライダーの技を使い傷つける偽者から守る為に。

そして篝は悟った。和也はあの不真面目でいい加減な仮面の下に優しく、気高く、熱い正義の心を持っていたのだと。何より…

(私より、ずっと強いな)

今は隣で雑談している和也を見ながら篝は改めてそう思う。

実際戦いぶりを見ていた限りでは生身同士なら自分よりは確実に強い。少なくとも生身同士でなら千冬ともやり合える辺り相当なものだろう。というより千冬同様に並の操縦者が操る量産機くらいなら格闘戦に持ち込めれば、ある程度渡り合えてもおかしくないかもしれない。

勿論和也がISを操縦出来ない以上専用機…しかも各国が漸く第3世代機の開発に着手したのに対してこちらはその先にある第4世代機…を持つ自分の方が戦力的には圧倒的に有利だ。

しかし箒は例えどんな高性能機を使おうが自分では生身の滝和也という男に『勝つ』事は出来ても『負かす』事は出来ないと確信している。

『勝つ』のは意外と簡単だ。ルールに従って一本取るなり1点でも多く入れたりすればいい。だが『負かす』となると話は別だ。

『勝ち』を認めるのは周囲だが、『負け』を認めるのは自分だけだ。だから『試合に勝って勝負で負ける』などという言葉があるのだ。自身が負けを認めなければ…その心や闘志が折れない限り本当の意味では『負け』ではないのだ。

そして箒には和也の心や闘志を折れる気がしない。例えその身体がどれだけ傷ついても、例えば力尽きても和也の心の牙が折れる事など決してないだろう。きっと最後の最後まで食らい付いてきて、戦い続けるのだろう。

(それに比べて私は…弱いな)

同時に箒は内心自嘲する。

滝和也に比べて自分はあまりに弱く、脆い。

幼い頃からそうだった。自分より後に剣道を始めたクセに自分より強くなつた一夏が気に入らなかつた。自分より後に一夏に出会つた

クセに専用機持ちというだけで一夏の…姉のせいで長い間引き離され、執拗に監視され心身共に疲れ果てる辛い目に遭い続けて漸く会えた想い人の隣で共に戦っていた皆に嫉妬していた。

だから自らは力に溺れ、一夏には辛く当たった。自分にも専用機があればと思いついた。そして大嫌いな…『白騎士事件』以来多くのテロまがいの事件への関与を疑われ、自身が家族や一夏を引き離される原因となった姉に力を…専用機をねだり、手に入れた。それどころか今度はそんな『汚い力』を誇示して他の者を見下す事までしていた。

そんな臆病で、卑屈で、汚くて、恥知らずで…弱い自分が滝和也に勝てるはずがない。まして先日和也の信頼に依って一夏が『電光ライダーキック』を放ったのを見た後では尚更痛感する。

もし滝和也が自身と同じ立場になっても力に溺れなかっただろう。

一夏には辛く当たらなかっただろう。他の皆と最初から仲良くできたであろう。

何よりISに乗れないなら乗れないなりに足掻いてみせた彼なら専用機など無くとも泣き言一つ言わずに、最後の最後まで諦めずに足掻き続けているだろう。その前に入学早々問題を起こして千冬と乱闘騒ぎを演じた挙げ句退学させられる可能性も否定出来ないが。

そして今も和也は篠ノ之束の妹である自分と…多くの事件への関与が疑われ、和也自身が負傷する原因となったと推測される女から専用機を手に入れた自分とも分け隔てなく接している。気付いていない筈がない。ああ見えてインターポール屈指の切れ者なのだから。

そんな事を考えている筈に構わずに和也は続ける。

「ところでよ、この辺り熊とか出ないよな？襲われるのはごめんだし」

「この辺りには出ないと聞いています。父や叔母から聞いた話では余程山の奥へ入ってわざわざ熊の縄張りに入る馬鹿でもない限り襲われないと言っていました」

「…その様子じゃ実際にそんな馬鹿が居たみたいだな」

「ええ、確かこの近くにある城南大学のアメリカンフットボール部の部員二人が一度熊の縄張りに侵入して襲われかけたと聞いています。他にも知らなかったとはいえ神社に侵入しようとして祖父に撃退された辺り余程の命知らずというか…馬鹿、なのでしょうね」

「手厳しいねえ…俺も君に聞いてなかったらその馬鹿の仲間入りしかねなかったのよ」

「…もうしてる気がします」

「うるせえ！というか千冬のヤツ等達に一体どんな事吹き込みやがったんだ!？」

こんな風にいつもと変わらず軽口を叩いてくる和也が箒には有り難かった。だから和也の為にも自分もそれに乗る事にした。それしか自分には和也の優しさに応える方法が見つからなかった。

ちなみに千冬からは「人間としては素晴らしいしいざという時は頼りになるが男としては最底辺」と評されている。セシリアはどうやら関係を誤解しているようだが、そのセシリアを含めた自分達…和

也曰く『イチカー軍団』も概ねその見解で一致している。

というより対千冬では和也と協調関係にあるが、一夏に悪影響を及ぼしかねないという点では千冬と一致しており、対和也ではむしろ千冬と同調しているという一時の欧州情勢よりかなり複雑怪奇な状況になっている。

だが箒は思考を中断し、立ち止まり周囲に気を巡らせる。殺気、しかも複数の…それが自分に向けられていると気付いたからだ。

和也も同様らしく立ち止まる。そして殺気の主に対して声を発する。

「…いい加減出てきたらどいだ？シャイなのは結構だが少し視線が痛すぎるんでね」

すると木陰から男達が出てきて、箒と和也を取り囲む。8人。虚無僧のような格好をした男達が現われた。身のこなしからして中々の手練だ。

「どうやらただの托鉢って訳じゃなさそうだな…何の用だ？」

和也は既に雰囲気が見えなまものに変わっている。箒も風呂敷を背中に背負い持ってきていた刀に手をかける。

するとリーダー格らしき男がそれに答えるように箒に告げる。

「…篠ノ之箒、そしてその連れの方よ。そちらに用も恨みもないのでな…その風呂敷の中身をおとなしく渡して貰おうか？」

「断る。仮に渡しても私達を殺す気だろうか？」

「気付いていたか…いかにも。だが手間は省けた…篠ノ之箒、その命、神に還すがいい！」

そう男は言つと鎖鎌を取出し、分銅のついた鎖部分を回し始める。他の者もめいめい武器を手に持ち、構える。

「ケツ、今時こんな時代劇みたいな展開に遭遇するなんてな…いけるか？箒」

「私は大丈夫です、滝捜査官」

「ならお言葉に甘えてこつちも派手に…やってやりますか！」

そう和也が不敵に笑い、箒が鞘から抜刀するのとほぼ同時に全員が一斉に動き始める。

「邪あつ！！」

男の一人が気合いと共に杖で箒を突きにかかるが箒はそれを見切り半身で躲すやそのまま杖を刀で両断する。ベッドすら刃こぼれさせずに両断出来る技量を持つ箒には朝飯前の事だ。

「少し寝ている！」

逆に更に踏み込んだ箒は柄頭で男の水月に一撃くれてやり昏倒させる。

そこに鉄拳をはめた男と角指をつけた男が箒に挑みかかるが、箒は刀の峰で二人の肩を打ち据えてやる。本来は骨を砕くための峰打ち

だが、今回はそこまでする必要はない。それでも尚激しい肩の痛みで動きが止まった鉄拳の男に当身を食らわせ吹き飛ばし気絶させると、残る角指の男の袖を掴んで払い腰で地面に投げ飛ばし、意識を刈り取る。

「お命、頂戴！」

そこに半棒を持った男と鎧通しを持った男がその隙を突いて襲い掛かる。

「俺を忘れてもらっちゃ困るぜ！」

しかし鎖鎌の分銅を躲し、手裏剣を叩き落として逆に蹴りで手裏剣の男を気絶させた和也が飛び蹴りで鎧通しの男を蹴り飛ばすと、半棒の男に正拳突きをモロに入れて地面に沈める。

「くっ！これほどとは…だが！」

残る鎖鎌の男は分銅で箒の刀を絡め取るとそのまま引き出す。しかし箒は刀をあつき放し、鞘を投げ付ける。

「愚かな！そんな手が！」

「馬鹿は…」

「…てめえさ！」

鞘を男が叩き落とした隙に和也が男に飛び膝蹴りを叩き込んで沈黙させる。

「これで全部か…大丈夫か？ 箒」

「私は、何とか…滝捜査官の方こそ無事で何よりです」

そう互いの健闘を称えながらも箒は刀と鞘を拾い上げ納刀するが…

「下がれ！！」

いきなり和也に突き飛ばされる。箒が見るとハンマー…掛矢を持った大男が和也に向かって掛矢を振り回している。和也も躲すのに必死だ。

「油断した…！？」

そして箒が殺気を感じて地面を転がると大斧を持った大男が振るった斧が先ほどまで箒がいた場所へと振り下ろされる。

どうにか立ち上がり鞘から抜かず刀で応戦しようとするが斧で刀を弾き飛ばされ、尻餅をつく。そして箒にトドメとばかりに斧を振り下ろそうと大きく振り上げる。

「箒！ こいつ！」

和也は叫ぶが掛矢が邪魔して近寄れない。つまり終わり、だ。

(…一夏…)

最後に愛する幼なじみの顔が思い浮かべると同時に目をつぶる箒に斧が無慈悲に振り下され…ない。

「…えっ…?」

斧は黒い手袋に掴まれ、途中で止められていた。そのまま黒い手袋の主は斧をひったくるとあっさりと柄をへし折り無造作に投げ捨てる。

「何の騒ぎかと思つて来てみれば…大の男が雁首揃えてか弱い女の子を寄つてたかつて袋叩きかよ。男として恥ずかしいとか、情けねえとは思わないのか?」

そう言つて黒い手袋を嵌めた男は不敵に笑つ。そのまま殴りかかつてくる大男の腕を掴んで捻り上げると言い放つ。

「大男、総身に知恵が何とやら…だな!」

そして一旦手を放すと大男を持ち上げて和也に攻撃している男に向かって思い切り投げ付ける。

その男二人は勢い良く衝突して纏めて気絶する。

「大丈夫かい?」

黒手袋の男は尻餅をついた状態の幕に向き直ると今度は先ほどの不敵な笑みとは一変して温厚そうな笑顔で手袋に包まれた右手を差し出す。

それはジャケットの中に胸に『S』の字が描かれたシャツを着た男…かつて二度に渡り自分を助けた、赤い雷光のような男だった。

「遅いぜ、茂」

「すみません、滝さん。少々寄り道し過ぎてしまつて」

やってきた和也と男は会話を交わす。箒は男の右手を掴み立ち上がると笑って男に礼を述べる。

「ありがとうございます、城さん。また、助けて頂いて」

「気にしないでいいよ、篠ノ之さん。けどまさか二度目の再会をこんな形で果たすことになるとは俺も思わなかったけどね」

そう言つて男：城茂もまた箒に笑い返すのであった。

第二話 二度目の再会（セカンド・リユニオン）（後書き）

第二話をお読み頂きありがとうございます。

本話からは前々から長すぎるとのご指摘がありましたので試験的な意味合いも兼ねて分割するような形での投稿となります。

では宜しければ次話もお願い申し上げます。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8119z/>

インフィニット・ストラトス×仮面ライダー～無限の蒼穹、正義の仮面～

2011年12月29日14時50分発行